
艦魂年代史外伝 ～大和の妹 幼き戦姫信濃の短き命の物語～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂年代史外伝　く大和の妹　幼き戦姫信濃の短き命の物語く

【Nコード】

N5781F

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

戦艦『大和』『武蔵』、二隻の超弩級戦艦は日本海軍の象徴として生まれその壮絶な歴史を戦い抜き沈没した。だが大和型戦艦はこの二隻だけでなく全部で四隻存在した。太平洋戦争の開戦により四番艦は建造途中で解体され、三番艦も建造中止となった。だがミッドウェー海戦の敗北で失った空母補充の為に急遽空母として建造される事になった。様々な苦難を乗り越え完成した大和型戦艦改造空母『信濃』。だがその命はあまりに短く儚いものだった。これは世界最大最強を目指して建造されるも様々な不幸に見舞われ完成直後

に沈没したあまりに短い生涯を生きた空母『信濃』の艦魂と、ある少女の血の繋がりを越えた温かな姉妹の物語である・・・

序章 大和三姉妹（前書き）

艦魂年代史外伝シリーズ第三弾は大和のもう一人の妹、空母『信濃』の艦魂のお話です。

今回は前回までのスピノフ作品ではなくシリーズ初の完全オリジナル作品となっています。

原作はあまり厚みがなく短いものでしたが、この改訂版は作者である僕が外伝シリーズ史上最高の物語と自負するもので、その規模は何倍にも膨れ上がっています。

何より原作とは大幅に物語が変更され、登場人物も一新されました。黒鉄大和が送る艦魂年代史外伝史上最長にして最高の物語。涙なくしては語れない信濃の生きた証を、どうか皆さんの胸に刻んであげてください。

序章 大和三姉妹

まだ会った事のないお姉ちゃんへ。

ボク、やっと生まれたんだ。早くお姉ちゃんに会いたいなあ。

大和お姉ちゃん、武蔵お姉ちゃん。やまと むさしボク、戦艦じゃないけどお姉ちゃん達の妹なんだよ？

ボクね、お姉ちゃん達を守りたい。

ボクに載せた戦闘機で、お姉ちゃん達の空を守りたいんだ。これはボクの役目であり、ボク自身の願いだから。

だから安心してね。ボクがお姉ちゃん達を守るから。お姉ちゃん達は安心してボクにはないその大きな大きな大砲で敵と戦って。お姉ちゃん達の空には、誰も近づかせないから。

ボクがいれば、お姉ちゃん達は最強なんだから。

ううん、ボク達大和三姉妹は世界最強だよ。

海を制す大和お姉ちゃんと武蔵お姉ちゃん。

空を制すボク。

ボク達が本気を出せば、アメリカなんか怖くないよね？

誰もボク達姉妹には勝てない。

艦種は違うけど、ボク達は唯一無二の姉妹なんだよ。

早く会いたいな。

建造が中止されたり停止したりで遅れたけど、もうすぐボク進水式だよ。

待っててね。

あ号作戦には間に合わなかったけど、ボクがんばるから。しょうかく

翔鶴さんや大鳳さんの分も、ボクがんばるから。たいほう

みんなを、そしてお姉ちゃん達を守る為に、ボクがんばるから。

もうすぐだよ。

もうすぐ会えるんだね。

早く会いたい。

大和お姉ちゃん、武蔵お姉ちゃん。

まだ会った事はないけど、大好きだよ。

そう言葉で伝えたい。

抱き締めてもらいたい。優しい言葉を掛けてもらいたい。

ボク、大和お姉ちゃんに右手を、武蔵お姉ちゃんに左手を握って
もらうのが夢なんだ。

そして、三人で笑いながら夕日が照らし上げるボクの甲板を歩き
たいんだ。

えへへ、子供っぽいかな？ でも、それがボクの夢なんだよ？

早く会いたい。会って、話がしたい。

もうすぐ会えるんだね？

ボク、楽しみにしてるから。

待っててね。ボク、もうすぐ完成するからね。

序章 大和三姉妹（後書き）

前書きであれだけ豪語しておいてすみません。

今回は序章という事で信濃の気持ちを描いてみました。

次話は明日に日付が変わった後くらいの深夜にでも投稿したいと思います。

次回は原作にはなかった『信濃』の不幸に見舞われた進水式のお話です。そこで『信濃』の艦魂と改訂版から現れるもう一人の主人公が登場します。

これから数日間続く『信濃』の物語をどうか最後までよろしく願います。

第一章 信濃と明日葉の固い絆（前書き）

今回から本編で、信濃と彼女が姉のように慕う少女の物語です。

原作とずいぶん違った展開とキャラクター配置なので、原作を読んだ方も楽しめると思います。

では艦魂年代史外伝《信濃編》、本格始動です！

第一章 信濃と明日葉の固い絆

一九四四年十月八日、その日横須賀海軍工廠第六船渠は静かな活気に満ち溢れていた。

天窓からは清々しい秋の柔らかな日差しが暗いドック内を照らしていた。そして、そんな光に照らされた一隻の大型艦が中に鎮座していた。

全長二六六・一m、全幅三六・三m、機関出力十五万三〇〇〇馬力、基準排水量六万二〇〇〇トン、最高速力二七ノットという前代未聞の世界最大最強の超弩級航空母艦 空母『信濃^{しなの}』だった。

大和型戦艦三番艦として建造されていた『信濃』は太平洋戦争開戦により建造を中止された。だが、一九四二年六月に起きたミッドウェー海戦で当時世界最強と謳われていた日本機動部隊の主力空母四隻が撃沈され、一瞬にして日本海軍は空母不足となった。

そこに白羽の矢が立ったのが『信濃』であった。

大和型戦艦の強力な防御力を使い、当時防御力の低いと言われていた空母に空前絶後の防御力を持たせた最強の空母を造る事が計画された。

それまでの日本空母とは次元の違う設計をされた『信濃』。

まず『信濃』はそれまでの空母よりも一・五倍くらい艦体が太い。これは戦艦として建造され、四六cm砲を装備するはずだった影響だ。

飛行甲板は強力な装甲が張られ、急降下爆撃に弱いという空母の弱点を克服。他にも米空母と同じ艦橋と煙突が一体化した巨大な艦橋を持ち、従来の空母とは艦容がまるで違った。さらには当時日本海軍の空母はほとんどが密閉式格納庫だったが、『信濃』は前部半分を米空母と同じ開放式格納庫となっていた。ミッドウェー海戦の悪夢、格納庫内誘爆撃沈を避ける為だ。

だが、その重装備の為に搭載機数は従来の空母の半分ほどの四七

機しか搭載できなかった。これは搭載予定だった烈風艦上戦闘機と流星艦上攻撃機が計画よりも大型化した事と米機のように主翼を折り畳むという事ができなかった事にある。その証拠に米海軍のエセックス級空母と比較しても決して格納庫は小さくなかった。

少ない搭載機だったが、海軍上層部としては『信濃』は『洋上の飛行基地』としてその驚異的な防御力を生かして他空母の前衛で艦載機の燃料弾薬補給をする役目を持っていた。

空母『信濃』は全てにおいて日本空母の頂点を目指した設計であった。

さつそく建造再開された『信濃』だったが、その工事は壮絶なものだった。

日々悪化する戦局の中、損傷艦の修理に資材や時間が奪われ、『信濃』の建造は遅れた。さらには熟練工を兵役に取られたのがそれに拍車を掛けてしまい、一時期建造が中止されてしまった。

だが、そんな中でも海軍上層部は早く『信濃』を完成させたいと願ひ、当初一九四五年二月完成予定だった『信濃』を五ヶ月も早い一九四四年十月十五日に完成させよという無茶な命令を出した。その結果工事は急ピッチで行われた。

そして今日、ついに『信濃』は進水式を迎えたのであった。

空母とは思えないほど広い飛行甲板の上に、一人の少女が立っていた。

さらりと風に靡く長めのポニーテールは輝く黒色が神秘的な光を放ち、そこから見える整った顔は超が付く美形。大きな瞳と小さな鼻、桜色をした唇はとても柔らかそう　　と言えば超絶美少女に聞こえるが、確かに少女は美形だが見た目はどう見ても十歳くらいにしか見えないので威力は半減する。

そんな少女は黒い日本海軍の士官軍服を着こなしている。

軍艦に女がいるのは今でこそ普通だが、当時ではありえない事だ。そんな時代の軍艦になぜ少女がいるかと言うと　　彼女は人間では

ない。

彼女は艦魂。古今東西七つの海に伝わる船乗りの伝説。

艦魂は文字通り艦の魂であり、艦魂はその化身。言い方によっては精霊のようなものだ。

大小どの艦にも艦魂は宿る。それは皆若い女の姿をしていて、通常の人間には見る事はできないのだ。

飛行甲板から進水式の作業をする工兵達を見詰めている彼女こそ、この超弩級空母の艦魂　信濃であった。

信濃は嬉しそうに微笑むと、その場でくるりと回ってみせる。柔らかなポニーテールが風に揺れてピヨピヨと踊る。

「進水式かあ、長かったなあ」

信濃は小さくつぶやいた。『信濃』は荒れ狂う戦局に振り回されまくったので、彼女がそう思うのは当然かもしれない。

だが、そんな『信濃』もついに進水式を迎えるまで完成していた。進水式は艦魂にとって重要なもの。竣工日こそが艦魂にとっては誕生日だが、艦魂は遅くても進水式にまではこの世に生を受ける。だから、進水日こそが誕生日だと思ふ艦魂も決して少なくない。

信濃にとっては、待ちに待ったそんな大切な日であった。

「早くお姉ちゃん達に会いたいなあ」

完成したら信濃は誰よりもまだ会った事のない姉に会いたかった。大和型戦艦一番艦『大和』と二番艦『武蔵』の艦魂の事である。

艦種は違うが、信濃にとっては大切な、たった二人の掛け替えのない姉である。

「どんなお姉ちゃんなのかな。規律に厳しい怖いお姉ちゃんかなあ？　それともすごく優しい大人びたお姉ちゃんかなあ？　うう、怖いけど早く会いたいなあ」

残念な事にその二つの予想は見事に外れている事は彼女は知らない。

破天荒な大和姉妹において、信濃は最も純粹無垢な子であった。まだ会った事のない姉達はどちらも連合艦隊旗艦になった事のある

る歴戦の戦姫だ。信濃はそれが誇りであった。

まだ会った事はないけれど、信濃にとって二人の姉は尊敬するに値していた。

だからこそ早く会いたい。今すぐにも二人の胸に飛び込んで、甘えたい。

自分達大和三姉妹がいれば、アメリカなんか怖くない。心からそう思っていた。

この進水式が終われば、二人に会う事にまた一步近づける。だから、こんなにも嬉しい。

自分が生まれるという事よりも、二人の姉に会える事が、信濃の心を震わせていた。

今回の進水式はドック内に海水を注水して行うもの。『武蔵』は実際に海に出て進水を行ったが、『信濃』は『大和』と同じくドック内で済ませる事になっていた。これも機密保持の為だ。

現在『信濃』には艦体を固定する為にロープが締められている。本当は海に出たいと思うのが、そもいかないのだ。

「初めての海、見たかったのになあ」

ちよっぴり残念だったが、これから自分の艦体が初めて水の上に浮かぶという事は変わらない。水の上に浮くの船として当然の事。だから、すごく楽しみだった。

艦体が水に浸かると、どんな気持ちなのだろうか。楽しみで楽しみで仕方がない。

信濃は何度も何度も腕時計で時間を確認する。進水式の時刻まであと少しだ。と、

「信濃おーッ！」

その聞きなれた声に信濃はパアツと笑顔を咲き誇らせて振り向く。すると、広い飛行甲板の上を駆けて来るきれいな長い黒髪の少女と目が合った。

「明日姉えッ！」
あすね

明日姉えと呼ばれた少女に向かって信濃は走り出すと、彼女の胸

の中に飛び込んだ。少女はそれを嬉しそうに受け止めると、胸の中で頬擦りしてくるかわいい信濃の頭をそつと撫でる。

「相変わらず甘えん坊さんだねえ」

「えへへ、ありがとう。明日姉えのおかげで私やつと進水できるよ」
「それはあたしだけじゃなくて、ここにいる工員みんなに言つてよ」

「うん。ありがとうおッ！」

そんな純粋な信濃を見て、明日葉は嬉しそうに微笑んだ。彼女にとって、信濃はかわいい妹のような存在なのだ。

だが、一つ疑問が残る。

軍艦には女性はいないというのが当時の常識である。だが、彼女は存在した。艦魂ではなく、普通の人間の女の子だ。それはなぜか。

答えは簡単だ。彼女は民間出身の工員。熟練工不足から海軍は海軍工機学校の生徒だけでなく畑違いの他の学部の子供、そして民間から女性工員を導入にして『信濃』を建造させたのだ。

彼女の名は御桜^{みさくら}明日^{あすは}葉。横須賀の民間造船所にいた工員で『信濃』建造の為に引き抜かれてこうして『信濃』の建造に携わってきたのだ。本当は客船の造船が夢だったのだが、まさかその初陣が世界最大最強の空母となる『信濃』の建造だとは思わなかった。

初めてここに来た時、明日葉はその巨大さに息を呑んだ。

圧倒的な圧迫感。それが第一印象であった。

あまりの巨大さに、これが本当に艦なのかと疑ったものだ。自分がいた造船所で造られる艦などとは桁違いであった。

そして何より、自分のような女性工員をも掻き集めなければいけない日本の現状に、彼女は薄々新聞などの情報がうそだと思い始めていた。

だからこそ、自分がこの艦を造り上げて日本を救う。そんな決心をした。

内部構造の把握の為に乗艦し、一通り済み甲板に上がった時彼女と出会った。

どこか寂しそうな顔をしたその少女に、明日葉は目が離せなくて、放っておけなくて、声を掛けた。

寂しいなら、あたしが力になってあげるよ？

その言葉から、二人の絆は始まった。

何気ないその言葉に、信濃がどれだけ救われたか。

暗いドックの中で、たった一人ですつといた彼女にとって、明日葉は最初で最高の《友達》であり、そしてそれは《親友》に変わった。

あれから数ヶ月。明日葉達工員のおかげで『信濃』はついに進水式を迎える事になった。

海軍上層部の無茶な工期短縮命令や熟練工不足から建造は事故や過労によって死者を出し文字通り命懸けとなったが、《『信濃』の完成が日本を救う事になる》との想いが皆を結束させ、寄せ集めの工員ではありえないような実力を発揮して今日を迎えた。

工期短縮による省略化や最低限の工程などによって不十分な部分も多々あるが、それは追々強化や修繕を行う事になっている。とりあえず今日は進水確認だ。細かい事はその後の艤装作業の際に行えば良い。

明日葉も連日の不眠不休の激務でかなりの疲労困憊状態であったが、信濃という心の支えのおかげでこうして立っていられた。

彼女の笑顔の為に、がんばらなくては。

そんな思いが彼女を奮闘させたのだ。

「本当に、明日姉え達には感謝ばかりだよ！」

「お礼なんていらないわよ。あなたは日本の希望なんだから。あなたが日本を救えば、あたし達が日本を救った事にもなる。こんな名誉な事はないわ　それに」

明日葉はそつと信濃の頬を撫でた。普通の女の子のように柔らかく、温かな肌。兵器の魂とかそんなの関係ない。ただ、彼女は純粹

に 信濃という妹の喜ぶ姿が見たかっただけだ。

「信濃が喜んでくれるなら、あたしは何だってしてあげるわよ」

その優しい言葉と柔らかな笑顔に、信濃は嬉しそうに笑みを浮かべた。その笑顔はこの世で最も穢^{けが}れていない、純粋な笑顔であった。

「じゃあボクね！ 長十cm高角砲がほしいッ！ あと早く烈風を載せたい！」

「・・・ああ、ちよつとそれはあたしには無理だなあ」

「ええッ！ ボクもつともつと強くなりたいッ！ それで、お姉ちゃん達を守りたいんだよ！」

「信濃のお姉さんつて、大和と武蔵つて言っただよね？ そんな戦艦聞いた事ないけど」

当時大和型戦艦は全て極秘。軍機として扱われていた。建造の際は専用の長巨大ドックを建造し、さらに見られないようにドックの周り全てを柵で囲んだりしたのだ。さらに『大和』と『武蔵』の乗組員達は例え親にだって自分が乗る艦を教えてはならないという徹底振り。戦艦『大和』『武蔵』、空母『信濃』の名が世に知れ渡ったのは戦後の話である。

「お姉ちゃん達は日本海軍の切り札だから軍機扱いされてるんだ。

だから普通の人はその存在だって知らないよ」

「ふーん、あたし達は戦艦つて言ったら『長門』^{ながと}がすぐ浮かぶけどね」

「あ、そつか！ 長門さんにも会えるかもしれない！ うう、早く会いたいよおッ！」

「ちよつとちよつと、まだ進水式なのよ？ 竣工はもう少し先よ」

明日葉が諭すように言うと、信濃は「そうだったあー！ ううっ、早くお姉ちゃん達に会いたいよおー！」とうるうるとした瞳でまだ開かれる事のない扉船^{とせん}の向こうを見詰める。そこにはまだ自分が出る事ができない蒼い海が広がっている。

「もうちよつとの辛抱よ。この進水式さえ終わればすぐに完成するから」

明日葉の言葉に、信濃は「ほんと？」と不安げに問う。そんな彼女に、明日葉はにっこりと微笑んで「もちろん」と断言した。彼女の言葉に信濃は嬉しそうに喜ぶ。そんな彼女を見詰める明日葉だったが、その瞳は寂しげだ。

もし『信濃』が完成したら、自分と彼女はお別れである。工員、特に女はすぐに降ろされるだろう。そして、自分の手の届かない場所にいったこの純粹無垢な少女は、兵器として戦場に向かう事になるだろう。

こんな小さなかわいい、普通の女の子が戦地に行くなんて、嫌だった。何より、大切な妹のような信濃を、そんな風にはさせたくない。

だが、運命とは悲惨なものであった。

彼女には戦ってほしくないと願うのに、自分は彼女を戦わせる為に完成させなければならぬ。胸の中で、二つの現実に明日葉は苦しむ。

「明日姉え？」

その声にハッとして顔を上げると、そこには自分を不安そうに見詰めている信濃がいた。その瞳は大丈夫と問うているように、わずかにキラキラと光っている。そんな彼女に、明日葉は心配掛けさせまいと笑みを浮かべる。

「大丈夫よ。ほら、じゃああたしは作業があるから降りるね

「そっか・・・一緒に浮かびたかったなあ」

しょんぼりとする信濃に、明日葉は小さく笑みを浮かべるとその頭をそつと撫でた。温かなその手に、信濃はそつと顔を上げる。そこには大好きなもう一人姉である明日葉の優しい笑顔があった。「あたしも同じ気持ちだよ。でも、いつまでもあたしに甘えないの。あんたはいつかひとり立ちするんだからさ」

その言葉に、信濃は「そうだね・・・」と悲しげにつぶやいてうつむいた。

そうだった。

明日葉は工員。自分が完成したらもう会えなくなるのだ。

血の繋がった姉には会いたい。でも、今までずっとこの寂しげな手を握ってくれていたもう一人の姉である明日葉と別れるのは嫌だった。

どうすればいいのか、自分でもわからない。

不安で胸が押し潰されそうになる。そんな自分を支えるような、温かな手。

やっぱり、明日姉と一緒にいたいなあ。

明日葉はそんな妹の気持ちを察したのか、そっと彼女の小さな体を抱き締めた。腕の中で、信濃は嬉しそうに自分からも抱き付いてきた。

しばしの抱き合い。

再び離れた時には、すっかり信濃の不安は消えていた。その真っ直ぐな瞳に、明日葉は笑みを浮かべる。

「じゃあね。ちゃあんと浮かびなさいよ」

「任せといてよ！ ボクがんばるからッ！」

屈託のない笑みを浮かべる信濃。その笑顔に、純粹に喜べない自分がいる事が、明日葉には辛かった。

お互い、別れるのは嫌なのだ。

「うん、じゃあ行ってくるね信濃」

「うん！がんばってね明日姉え！」

手をブンブン降る信濃に見送られながら、明日葉は艦を降りた。

その背中に向かって、信濃は彼女の姿が見えなくなるまでずっと手を振り続けていた。

第一章 信濃と明日葉の固い絆（後書き）

原作とほとんど変わらない信濃と初出場の明日葉。本当の姉妹のような二人はどうでしたでしょうか？

信濃はボクっ子、明日葉は一人称が《あたし》となっています。どちらも本編にはいなかったタイプのキャラですね。これからこの二人を中心に物語は進んでいきます。今回はついに進水式本番ですが、史実どおり事故が起きてしまいます。

信濃と明日葉はどうなるのか。次回を乞うご期待！

第二章 悲劇の進水式（前書き）

今回は不運に見舞われた『信濃』の進水式のお話です。
不慮の事故に信濃は？

そして明日葉はどうなるのか？

第二章 悲劇の進水式、始まりとござそうろう。

第二章 悲劇の進水式

艦を降りた明日葉はすぐに『信濃』が鎮座している作業溝の横に移動する。すでにそこには他の大勢の工員達が集まっていた。

「遅いぞ御桜！」

「申し訳ありません！」

工員長に怒鳴られ、明日葉はビシッと起立する。敬礼をしないのは彼女が軍人ではなく一般人だからだ。

明日葉が合流すると、工員達は急いで進水作業に入った。注排水装置を起動させて海水を注水する。溝の横に作られた穴から滝のようにな水が噴き出すのはその直後だ。

毎秒限りなくトン単位の勢いで水が注水され、『信濃』の艦底に水が迫る。その光景を明日葉、そして信濃は見詰めていた。

そして、

「艦底着水ッ！」

ついに『信濃』の艦底が水に触れた。後はそのままの勢いで海水がどんどん注水され、喫水線以下の赤い塗装の部分が次第に水の中に消えていく。

明日葉は心の中でガッツポーズをした。

水に浸かる『信濃』は何ら異常はない。つまり成功である。まだ完全検査はしていないが、明日葉は進水成功を確信していた。

そして信濃もまた成功を確信していた。

水が艦底に触れた瞬間、言いようのない感覚が体を走った。それはすぐに消えてまた元に戻るが、信濃はこれが艦が海に浮かぶ最初の感覚だと理解した。冷たいプールに最初に入る時異常に冷たく感じるあの感覚である。入ってしまったえばその温度にも慣れてしまう。そんな感じであった。

海水に触れた事によって、自分が艦として新たな一步を踏み出したのだと感じていた。

これでは最終工程や対空兵器の艤装、機関の増強などまだ課題は山積みだがとりあえず完成は近くなる。

信濃はグツと小さな拳を握った。

「お姉ちゃん、もうすぐ会いに行くからね」

信濃は南方に向かって静かに敬礼した。その先には来るべき決戦に備えて待機している『大和』と『武蔵』がいる。まだ見ぬ姉達が、そこにいるのだ。

明日葉と別れるのは悲しい。でも、この向こうには夢にまで見た本当の姉が待つてくれている。それだけが、信濃の心を突き動かしていた。

遠く離れた場所にいる明日葉は甲板の上で見事な敬礼をしている信濃を見て小さく微笑んだ。

例え彼女の向かう先が戦地だとしても、今こうして見える彼女はあんなにも輝いている。

まだ会った事のない尊敬する姉の為に、彼女は必死に追い掛けている。

姉の話をする彼女の楽しそうな表情は、本当に楽しそうだった。あの笑顔を見ていると、そんな彼女の夢を叶えてあげたいと願ってしまう。しかしそれは彼女を完成させ、戦地に送るという事にも繋がる。

矛盾する想い。これほどまでに苦しく辛い事はない。

明日葉は複雑な気持ちで進水式を見守る。すでに『信濃』は完全に水に浮かぶ状態になっている。後は浸水していかないかなどの確認作業だ。

確認員達が作業を行っている間に、明日葉は別の作業に取り掛かる事になった。見渡す限りまだ少年のような工兵が多い。中には民間から引き抜かれた者も多く、自分と同じ女性の姿もかなり見受けられる。皆一様に疲れ切った顔をしているが、その瞳はキラキラと輝いていた。

ついに『信濃』がここまで完成した。それは今までの自分達の苦

労が形となつて現れ、そして日本を救う事に繋がる。皆、希望に満ち溢れていた。

明日葉は友人と一緒に部品などを倉庫から出す作業をしていた。荷車に部品を満載して『信濃』の横の管制部に戻る。

すでに『信濃』の確認作業は後半に入っていた。誰もが『信濃』管制間近を確信していた。もちろん明日葉も。そして 信濃も。

信濃は一人水に浮かぶ感触を楽しんでいた。初めて水に浮かんだ。浸水箇所はない。明日葉達工員の必死の作業のおかげだ。彼らには感謝の言葉しかない。

「お姉ちゃん・・・」

信濃はギュッと胸の前に拳を握った。この胸には大和姉妹の末っ子としての誇りと、志が秘められている。

もうすぐ会える。信濃は嬉しくて仕方がなかった。

進水式は無事に終わる はずだった。

バキヤアンツ！

「ッ！？ な、何ッ！？」

明日葉だけではない。工員達もその不気味な音に振り返った。

信濃もその音を聞いていた。だが、それは自分からではない。音の原因は 海と船渠を仕切っている扉船からだった。

「ま、まさか 明日姉えッ！」

信濃は明日葉の方に向かって走り出した 直後、扉船が何もしないのに外れ、大量の海水がドックに流れ込んで来た。

「扉船破損ッ！」

そんなの誰が見てもわかっている。工員長はすぐに復旧作業を自ら陣頭指揮をして行すが、荒れ狂う水がそれを阻む。

明日葉も助けに向かおうとして、それに気づいた。

「『信濃』がッ！」

その声に皆が振り返って『信濃』を見る。

大量の荒れ狂う海水に襲われ、『信濃』の艦体が暴れ回っていた。ロープが辛うじてそれを繋ぎ止めているが、今にも切れそうだ。

明日葉は無我夢中でロープを掴んだ。他のロープにも別の工員達が掴み掛かって必死に『信濃』の暴走を止めている。だが、所詮は人力。基準排水量六万二〇〇〇トンの巨艦を繋ぎ止める事など不可能だった。

パンツという嫌な音と共にロープが切れた。一本が切れると二本、三本、五本、十本と次々に切れていく。それは最悪の連鎖だった。

「信濃おッ！」

明日葉は必死になってロープを掴んでいた。皮の手袋が引き抜かれようとするとロープと擦れて火傷しそうなくらいに熱くなる。だが、諦めない。このロープは死守する！

必死に引き止める明日葉。彼女のロープが最後の一本であった。

自分が守っていたロープを失った工員達も次々に掴み掛かって『信濃』を繋ぎ止める。だが、明日葉達の努力も空しく、ロープは中ほどで千切れ、『信濃』を繋ぎ止めるものは全て失われた。

「信濃おおおおッ！」

「明日姉えッ！」

荒れ狂う自分の艦体からだに信濃は恐怖する。艦魂は艦の魂だが、自分の力で自分の艦体を動かす事などできないのだ。そもそも可能だったとしても機関が動いていないのでどちらにしてもどうする事もできない。

暴れ回って上下に激しく揺れる艦体に、信濃は飛行甲板にしがみ付いて必死に耐えていた。

恐怖で気が狂いそうになる。

怖い怖い怖い怖いッ！

信濃は無我夢中で隣に手を伸ばすとギュツと握り　しかしそれは何も掴む事はできなかった。

「明日姉えッ！」

いつも隣にいてくれる頼れる姉である明日葉はいない。たったそれだけで信濃は闇よりも暗い絶望感を感じた。

「明日姉えッ！」

信濃は制御不能で暴れ回る艦体からだの上で必死にしがみ付きながら這うようにして明日葉に近づこうと進む。陸に上がれない艦魂である信濃では船渠の中とはいえ陸地にいる明日葉の所へは行けない。それでも、できるだけ彼女の近くにいたい。彼女の姿を見たい、彼女の声を聞きたい。その一心で信濃は這い進む。

「明日姉えッ！ 明日姉えッ！」

「信濃おおおおッ！」

その声に、安堵する自分がいた。

飛行甲板の端に振り落とされないように必死にしがみ付いて視線を下げると、明日葉が自分を見ながら叫んでいた。

「信濃おおおおッ！」

「明日姉えええええッ！」

信濃は、届かないとわかっていても必死に腕を伸ばした。明日葉も同じように信濃に向かって手を伸ばす。

決して触れられない。でも、心は一つだ。

ゴガアアアアンッ！

「きゃあッ！」

激しい衝撃と共に激痛が走り、信濃は激震に吹き飛ばされた。明日葉は突如消えた信濃に必死に叫び続ける。

飛行甲板に転がった信濃は痛みを感じた。手を当ててみるとぬるいと嫌な感触と温度がした。見ると、白い自分の手には真っ赤な血がべつとりと付いていた。

「血・・・？ い、いやぁ・・・ッ！」

起き上がると、額から血が一筋流れてきた。そのぬるい温度と感触に、信濃は悲鳴を上げる。

「信濃おッ！」

明日葉は信濃の悲鳴に気が狂いそうになった。

大切な妹のような彼女を、なぜ自分は守れないのか。たった、彼女を抱き締めてあげるだけで、それで十分なのに、今の自分にはそれができない。悔しくて、悔しくて仕方がない。

「信濃おッ！」

その時、再び激震と轟音が響き渡った。同時に、彼女のしか聞こえない信濃の悲鳴も・・・ッ！

明日葉は、何もできなかった。

ただ無力に、彼女の悲鳴を聞きながら、名前を叫ぶ事しかできなかった・・・

扉船を応急処置で止め、ドック内の海水を全て排水して事故はひと段落した。

明日葉はいても立つてもいられず走り出して『信濃』に乗り込んだ。飛行甲板に上がると、そこにはポツンと立っている信濃がいた。

「信濃・・・ッ！」

「明日姉え・・・」

振り返った信濃を見て、明日葉は絶句した。

彼女の頭には血がにじんでいる包帯が巻かれていた。左腕にも包帯が巻かれ、その姿はつい数時間前に会った時とはまるで違って痛々しいものだった。

「信濃・・・」

「えへへ、怪我しちゃったよ」

信濃はおどけてみせるが、その痛々しい姿に明日葉は視線を逸らした。見ていられなかった・・・

「明日姉え、あのね」

「ごめんなさい」

「え？」

明日葉はバツと頭を下げた。驚く信濃が見たのは、小刻みに震える彼女の肩。その震えに、信濃は彼女が自分のせいで苦しんでいるのだとわかった。

明日葉が悪い訳ではない。信濃だってちゃんとわかっている。でも、明日葉にとっては工員として姉として、彼女を危険に晒した事に対して自分で自分が許せなかった。

事故の原因は単純な人為的ミスだった。

雇船のバラストタンクと『信濃』自体のバラストタンクに重り用の海水が全く注水されていなかったという信じられないミス。工員失格ものの失態だ。

熟練工不足に加えての工期短縮の為の激務による疲労が工員達に余裕をなくさせ、こうしてミスを起こして事故が起きてしまった。疲れていた。そんなのは理由にならない。

工員ならば、自分が造った船は完成まで無事でなくてはならない。そんな当然の事を、自分達はできなかった。

そして、そのせいで信濃が傷ついた。

明日葉にとって、これだけ情けなくて自分に対して怒りを感じる事はなかった。

「ごめんなさい・・・ッ！ あたし達のミスのせいで・・・あなたにそんな傷を負わせて・・・本当にごめんなさい・・・ッ！」

「明日姉え・・・」

「ごめんね・・・ほんとに、ごめんね・・・ッ！」

頭を下げ続ける明日葉に、信濃は一瞬悲しげに顔をゆがめるが、すぐに首をフルフルと横に振って明日葉に抱き付いた。

罪悪感で胸が押し潰されそうな明日葉を、信濃は優しく包み込んだ。

「明日姉えは悪くないよ。それどころかボクをここまで造ってくれた事にすごく感謝してる。顔を上げてよ。ボクね、明日姉えの元気な笑顔が一番好きなんだ。だから 笑ってよ」

「信濃・・・」

「明日姉え。ボクね、明日姉えを本当のお姉ちゃんのように思ってるんだよ？」

「あたしも信濃の事は妹のように思ってるわよ」

「　　だったら、ボク達に謝りの言葉はなしだよ」

「信濃・・・」

顔を上げた明日葉に、信濃は満面の笑みを向ける。その笑顔は穢れをしない純粹そのもの。純粹な、自分を心配してくるかわいい妹だ。

明日葉は無言で信濃を抱き締めた。信濃は嬉しそうに笑みを浮かべると、そっと自分からも明日葉に抱き付いた。

いつまでも抱き合う二人の少女。

散々な進水式であったが、事故のおかげで二人の絆はより強く結ばれたのであった。

第二章 悲劇の進水式（後書き）

どうでしたでしょうか？

僕としてはちよつと物足りない気がします、だからといってこれ以上大きくできないという作家としての限界を感じたお話でした。次回は少し時間が飛んで『信濃』竣工。そして呉に向かってついに出撃します。

初めての航海にして最後の航海となるその旅路、一体どうなっていくのか。

そして、本編に登場したあのキャラ達や新たなキャラが登場の予感ッ！？

次回もまたお楽しみに〜！

第三章 運命の処女航海（前書き）

時は少し飛んで今回はついに『信濃』が呉に向かって出撃します。これが最初で最後の旅になるとは、この時誰が思っていたのでしょうか？

そして、出撃する『信濃』。しかし完成した『信濃』に明日葉は・

・さらに本編の有終の美を飾った十勇士のメンバーが一部登場の予感ッ！？

最後までどうかお楽しみください。

第三章 運命の処女航海

事故の影響で修理作業が新たに加わった『信濃』は完成予定日を一ヶ月遅らせる事となったが、この一ヶ月が最も大きな転換期であり、唯一『信濃』が活躍できる可能性のあった期間であつた。

十月二三日～二五日、フィリピン攻略を目指す米軍とそれを阻止しようとする日本海軍がフィリピン沖で総力激突。史上最大の海戦となるレイテ沖海戦が起きた。

日本海軍は戦艦『大和』『武蔵』『長門』を基幹とした水上打撃部隊をレイテ湾に突入させ、敵輸送船団及び上陸部隊を撃滅しよう^とと出撃。艦載機や搭乗員不足によって再起不能状態に陥っていた機動部隊は^四部隊としてフィリピンの米機動部隊を誘い出す事になった。

機動部隊は見事に米機動部隊を引き付ける事に成功。水上打撃部隊は残存敵戦力に苦闘し甚大な損害を出しながらもレイテ湾に向かった。しかし水上打撃部隊司令長官、栗田健男中將^{くりた たけお}は突如作戦を中止。艦隊を反転させ作戦は失敗に終わった。後に《謎の反転》と呼ばれる太平洋戦争の謎の一つである。

このレイテ沖海戦で日本海軍は戦艦『武蔵』以下主力艦艇の多くを失った。真珠湾以来常に日本海軍の前線で戦い続けた歴戦空母『瑞鶴』^{ずいかく}以下機動部隊全空母も沈没し、連合艦隊は事実上壊滅した。さらにフィリピンを失い南方資源地帯との補給路を断たれてしまった事により以降燃料不足で残存艦艇は満足に行動ができなくなつてしまった。

しかししも『信濃』が完成していても、戦局は変わらなかったであろう。載せるべき艦載機がなければ、空母など意味がないのだから。

だが、もし完成していれば、一目だけでも信濃と武蔵は会えたかもしれないかった。

姉の訃報に、信濃は泣き崩れた。

何よりも楽しみにしていた姉と会うという夢は、永遠に失われてしまった。

明日葉は泣き崩れる信濃を抱きかかえながら、何度も謝った。もしあの時自分達があんなミスをしなければ、彼女は姉と会えたかもしれないなかったのに。

泣き崩れる信濃と、そんな彼女を抱き締めながら謝り続ける明日葉。

しばし泣き続けた信濃だったが、明日葉は悪くないと彼女を抱き締めた。負い目を感じて顔を上げられない明日葉を、信濃は優しく包み込んだ。そんな信濃に明日葉も小さく笑みを浮かべると、そっと抱き締めた。

彼女の腕の中、信濃は一筋の涙を流す。

武蔵という姉の死。

それは決して受け入れられないような事だったが、全てが真実だった。

明日葉の柔らかくて優しい腕の中、信濃は武蔵という今は亡き姉を知る為にも、そして唯一残った姉である大和と会う事を再び胸に刻み込んだ。

そして・・・

一九四四年十一月二十八日、横須賀湾から一隻の超大型空母が出撃した。

荒れ狂う波ですらも吹き飛ばすその勇姿は、大和型戦艦としての名残をまざまざと見せ付けていた。

白波を残しながら海を翔けるその空母は 『信濃』であった。

苦難を乗り越えた『信濃』は、十一月十九日に完成した。しかし完成したと言っても工期短縮に影響で一部手抜き工事がされていた。軍艦の最大の脅威は魚雷だ。魚雷は水面下の艦体に穴を開けて海水をぶち込み艦を傾かせ純粋な対艦兵器。喫水線以下が不十分では

本末転倒なのでそこは十分な工事がされていたが、その上である水面上の装甲は工期短縮で少し薄かった。

他にも機関部が不十分で十二基あるボイラーのうち稼動可能だったのは八基だった為、最高速度二七ノットのうち一九ノットしか出ず、対空装備もほとんど装備されていなかった。

そんな状態だが一応完成という形で『信濃』は横須賀で残りの工事を行っていたが、当時マリアナ沖海戦でマリアナ諸島を失った日本はそこから発進するB-29の爆撃で本土が焼かれていた。横須賀も空爆され、危険を感じた海軍上層部はすぐに『信濃』をまだ安全な広島県呉に行き、そこで残りの作業を済ませるよう命令した。

そんな経緯があつて、まだ十分とはお世辞にも言えない『信濃』は第十七駆逐隊（駆逐艦『雪風』^{ゆきかぜ}『磯風』^{いそかぜ}『浜風』^{はまかぜ}）に護衛されながら、敵潜水艦が出没する日本近海 敵地に飛び出たのだ。

海を翔ける超巨大空母『信濃』は他を圧倒する巨大さだった。

普通の空母なら揺れる波も『信濃』の前では小波同然でまったく艦は揺れなかった。大和型戦艦の名残である他の大型空母の倍以上の排水量が成せる技だ。

そんな『信濃』の防空指揮所に、信濃は静かに立っていた。先月の事故による怪我はすでに治り、今では包帯ではなく軍帽が被られている。

天気はあいにくの曇り。燦々（さんさん）と輝く太陽は雲に隠れて見えない。初めて本物の太陽が見れると思っていたのに、残念だった。

信濃はこうして出撃前からずっとここに立っていた。なぜなら、ここで会う約束をしているからだ。その約束の相手とは

「信濃おッ！」

その大好きな声に振り向くと、艦橋横の階段を上って明日葉がやって来た。その姿を見て信濃はパアツと笑顔を咲かせる。

「明日姉えッ！」

信濃は迷わず明日葉の胸に飛び込んだ。明日葉もまたそんな信濃をしつかりと抱き止める。

「えへへ、まさか明日姉と一緒に初めての海に出れるなんて、嬉しいなあ」

「あたしもよ。信濃の処女航海に付き合わせてもらえるなんてさ」

二人はそう言うと言いつつ嬉しそうに笑みを浮かべ合った。

名目上は完成だが実際は未完状態の『信濃』は呉への回航中であつても作業が行われていた。その為乗組員だけでなく工員も大勢『信濃』に乗り込んでいた。その中に明日葉もいたのだ。

本当は軍艦に女が乗るのはタブーで反対も多かったのだが、彼女が艦魂が見えるのだと知っている工員長やその他多くの仲間に推薦されて乗り込める事になり、こうして『信濃』の処女航海に信濃と共にに行く事になったのだ。

「明日姉えッ！ ボク海を走ってるよ！」

「ええ、そうね。みんなのおかげよ」

「うんッ！ ありがとうッ！」

信濃は嬉しそうに笑みを浮かべながら明日葉に抱きつき続ける。

明日葉もまたそんな甘えん坊な妹を優しく抱き締めた。

抱き合う二人の少女。その姿はとても微笑ましく、邪魔を私用など考えるのは野暮であつた。だから・・・

「・・・ああ、お取り込み中そうですね。すみません」

その声に驚いて振り向くと、そこには気まずそうな顔をした少女小さなポニーテールをした少女が立っていた。その後ろには二人の少女が立っている。少女達は全員水兵服を着ていた。

「えっと、あなた達は誰？」

信濃の問いに対し、三人の少女はカツと踵を揃えたと見事な敬礼をする。慌てて信濃も不器用ながらも敬礼を行う。明日葉は軍人ではないのでそうしようかと迷っている。

「お初にお目に掛かります。私はこのたび貴官を護衛させていただきます第十七駆逐隊旗艦、駆逐艦『雪風』の艦魂です」

小さなポニーテールの少女　雪風は笑顔であいさつした。

「同じく駆逐艦『浜風』の艦魂。よろしくねえ」

「ちょ、ちよつと浜風！　上官に向かって何て言葉遣いしてるのよッ！」

「気にしない気にしない」

ニヤハハと屈託のない笑みを浮かべるセミロングの少女　浜風。その明るい笑顔に信濃と明日葉は若干警戒を解いた。雪風はそんな浜風を注意するが、浜風は「ごめんごめん」悪びれた様子もない。

「まったく！　ご無礼をお許しください信濃司令」

「し、司令ッ！？　ボクってそんなに偉くないよおッ！？」

司令という雲の上のような呼び方に驚く信濃だったが、雪風達是不思議そうに首を傾げる。

「いえ、司令は我が大日本帝国最後の大型空母です。次期機動部隊旗艦となられるのですから司令は打倒かと」

「そ、そんな事ないよおッ！　ボクはまだまだ未熟で」

「謙遜しないの。信濃司令」

からかうように言う浜風に信濃は「はうう・・・」と顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。そんな信濃に明日葉が近づこうとした時、今までずっと本を読んでいたボブカットの少女がパタンと本を閉じて浜風の頭をその分厚い本、しかも角を下にして振り下ろした。

「ぎよわああああッ！？　な、何するのよ磯風姉さんッ！？」

「少し静かにしなさい」

小さいが凜とした声を発した少女は本を脇に構えると静かに一礼した。

「初めまして。駆逐艦『磯風』の艦魂です」

少女　磯風は小さく名乗ると再び読書を再開した。そんな二人の少女を見詰め、雪風はあど疲れたようにため息をする。

「すみません、騒がしい妹達で」

「ううん、楽しそうでうらやましいよ」

雪風、磯風、浜風の三人は同じ陽炎型駆逐艦で雪風は八女、磯風

は十二女、浜風は十三女である。駆逐艦は艦型で十数隻存在するの
で姉妹も多いのだ。ただし、激しい戦争を生き残っているのはわず
かしが残っていないのが現状だ。『信濃』の護衛に三隻しか回され
ないのもその理由の一つであった。

信濃はそんな護衛をしてくる優しい先輩達に向かって敬礼した。
「改めまして、ボクは大和型戦艦三番艦改造空母『信濃』の艦魂。
護衛の方よろしくね」

「こちらこそ」

「それと、この方はボクの工員をしている御桜明日葉さん。ボクが
生まれた時からずっと支えてくれているお姉ちゃんみたいな人」

「こんにちは。へえ、あなた達も艦魂なんだ」

信濃の説明と明日葉の言葉に三人は驚いた。それもそのはず。人
間の女に会えるなんて艦魂の世界では自分達が見える男性軍人と会
う確率よりさらにグッと低い。さらに艦魂が見えるとなれば天文学
的数値の確率だ。

「へえ、人間の女の子なんて初めて見たよ」

「貴重な資料となります」

興味津々で見る浜風と磯風。普通の艦魂は当然そんな反応をする
であろう。だが、たった一人だけは違った。

「雪風さんはあまり驚かないんだね」

信濃は一人いくらか余裕を持っている雪風に不思議そうに問う。

「いえ、人間の女性はこれで四人目なのであまり」

「四人ツ！？ それはすごい！」

「いえ、私が忠誠を誓う大和司令の周りはいつも騒がしかったです
からこれくらいは」

雪風は苦笑いしながら答える。だが、ふと視線を上げると信濃が
硬直していた。明日葉もまた目を大きく見開いて驚いている。

「え？ あ、あれ？」

雪風は自分の言動が何かおかしかったのかと頭の中で再生するが、
別段変わった部分は見当たらなかった。

「あ、あの信濃司令」

「・・・今、大和司令って、言った？」

「え？ あ、はい あッ」

信濃の言葉に、雪風も彼女の言葉の意味を汲み取った。

信濃は大和型戦艦三番艦の改造空母。つまり、大和は彼女にとって姉にあたる存在なのだ。そして、今は亡き武蔵もまた彼女の姉であり、信濃はまだどちらとも会った事がない。姉がどういう人物なのか、だったのかを、彼女は知らないのだ。

目の前に姉を知る人がいる。それは今までずっとドックの中にいた彼女にとって処女航海よりもずっと嬉しい事であった。

姉の話聞きたい。そう思うもうまく口には出せず信濃は明日葉の後ろに隠れてしまう。明日葉はそんな信濃の背中を押してやるがいざとなると勇気が出ない。

そんな信濃と明日葉のやり取りを見ていた雪風は二人に向かってにつこりと微笑んだ。

「お姉さんのお話、してさしあげましょうか？」

雪風の問いに信濃は驚いたような表情を浮かべたが、返答はもちろん

「お願いします」

呉に向かう空母『信濃』と護衛の駆逐艦『雪風』『磯風』『浜風』の四隻は無事に東京湾を出て針路を西南西に取った。

だが、その姿を深海から睨む者がいた。

曇天の空の下、波間に現れた一本の人工物 潜望鏡。

暗い海の下から『信濃』を追跡しているのは米海軍バラオ級潜水艦の一隻、『アーチャーフィッシュ』であった。

海の中から『信濃』を睨む『アーチャーフィッシュ』はすでに戦闘態勢に入っていた。艦長の命令があればいつでも魚雷が発射できる状況にある。

目の前の大きな獲物に歓喜沸く乗組員達を艦橋の端で見詰める少

女がいた。海の蒼のような美しい蒼髪に春に華やぐ若葉のような黄緑色の瞳を細メガネで煌かせる知的そうな少女はこの『アーチャーフィッシュ』の艦魂だ。

潜望鏡から見える景色を自らの瞳にリンクさせ、彼女は『信濃』を見ていた。そして頭の中にある日本軍の空母のシルエットと照らし合わせた。

「・・・『ジュンヨウ』か。中型空母だが相手にとって不足はないわね」

アーチャーフィッシュはこの時『信濃』を似たシルエットの商船改装空母『隼鷹』と誤認していた。それは艦長以下乗組員も同じ。彼らは『信濃』の存在などまだ知らなかった。彼らがそれを知るのは戦後の事だ。

海の中を進む『アーチャーフィッシュ』は『信濃』を攻撃しようとしていたが、向こうは二〇ノット近くで航行しているので海中を進む『アーチャーフィッシュ』はそれに追いつけず攻撃どころかついて行く事ですら必死の状態であった。

だが、この時護衛の『雪風』などはこの『アーチャーフィッシュ』にはまだ気づいていなかった。

すでに米潜水艦の静寂能力は日本海軍の水中搜索能力を上回っていた。さらに乗組員の錬度不足も災いし見張りも十分ではなかったのだ。

こうして、『信濃』とそれを守る『雪風』『磯風』『浜風』の四隻は自分達を追い掛けて来る『アーチャーフィッシュ』の存在には気づかずに航行を続けた。

第三章 運命の処女航海（後書き）

明日葉ちゃんと『信濃』に乗ってましたねえ。良かった良かった。

『信濃』は書類上は完成でも、実質的にはまだまだ未完成。一日でも早く完全完成するように、明日葉達工員は作業を続けているのですね。

そして、十勇士からは雪風、磯風、浜風の三人が登場！ 物語はさらにコメディー風にッ！？

・・・しかし、そんな彼女達を狙うアーチャーフィッシュの影。様々な想いが交錯する『信濃編』！ まだまだ続きますッ！

次話更新は今日の夜にでもしたいと思っています。

信濃が知る雪風が語る姉達の姿とは！？

では次回もお楽しみに！。

第四章 偉大な姉の軌跡（前書き）

この休み中になんとか終わらせたいという事もあって、予定を変更して今日は合計三話更新したいと思います。

今回はサブタイトル通り信濃が大和と武蔵の事を雪風から知るお話です。

彼女が尊敬していた姉の真の姿を知った信濃は一体ッ!?

そして、明日葉の想いとはッ!?

今回は物語に明るさを出す為にコメディー風になっています。

本編を読んでいる人は楽しめる事間違いない!？ そんなお話です。

第四章 偉大な姉の軌跡

航行を続ける『信濃』の使われていない部屋に信濃達は集まってお茶を飲んでいた。

突貫工事が行われただけあつて艦内には装飾品などはほとんどなく、信濃が艦魂の力を使ってテーブルなどを出して皆でそこに座りながらのお茶会だった。

「私は大和司令が連合艦隊旗艦になった時から司令の従兵をしていて、駆逐艦の身でありながら多くの士官の方々と面識があります。もちろん、武蔵司令もよく存じています」

信濃は希望に満ち溢れていた。

まさかこんな所でこんな形で姉達の事が聞けるなんて思つてもみなかったのだ。特に今はもう会えない武蔵の事まで知れるというのは彼女にとってはどんなプレゼントよりも嬉しい事であつた。

雪風は紅茶を一口含むと静かに話し始めた。

大和の事、武蔵の事、そしてその二人を含む大勢の艦魂に好かれている長谷川翔輝はせがわ しょうきという軍人の事、金剛こんごうや榛名はるな、伊勢いせなど他の艦魂の事。自分が知っている知識をできる限り雪風は信濃に伝えた。

雪風の説明は一時間近く掛かった。それほどまでにあの二人を中心とした仲間は言いたい事がたくさんあつたのだ。

「・・・これでとりあえず以上です。何か質問はありますか？」

雪風が信濃を見ると、彼女は嬉しそうな笑みを浮かべていた。その笑顔は今まで見た中で一番楽しそうだ。

「そっか、大和お姉ちゃんってすごく優しい人なんだ。武蔵お姉ちゃんもちよつと無茶苦茶なところもあるけど、すごく頼りになる人だったんだね」

「まあ、周りをかなり巻き込む迷惑ばかり起こしていた人ですが、指揮官としてあの方ほど優秀な方は他にいなかったですね。何より、心から長谷川大尉を愛していらっしゃいました」

「私は武蔵司令と一緒に捷一号作戦に参加したけど、『武蔵』は壮絶な死闘の末に沈んだ。あの人は連合艦隊の鏡だったよ」

雪風と浜風の言葉に、信濃は今は亡き武蔵という姉に会ってみたかったと心から思った。きつと誰よりも純粋な人だったのだろう。だからこそ、一心に彼を愛し続けて周りが見えなくなったりもした。なんともかわいらしいじゃないか。

そして今も生きている大和とうもう一人の姉。この人には純粋に会ってみたかった。話を聞く限りとても優しい人に思えた。理想のお姉ちゃん像そのものだった。

「雪風さんの話を聞いて今まで以上に早くお姉ちゃんに会いたくなつたよ」

「そうですか、それは良かったです」

雪風はにっこりと微笑んだ。その笑顔はとても優しく、見ているだけで幸せになってしまふ。そんな信濃と雪風を見て、ちよつと悔しい明日葉。

「でもその長谷川さんってすごいね。あたしと同年くらいなのに大尉で、しかもそんなにたくさん艦魂に好かれてるなんて、きつとかっこいい人なんだろうなあ」

明日葉は頭の中で雪風の言葉だけで《長谷川翔輝》という人物を想像してみる。どうパーツを組み合わせてもかっこいい人にしかならなかった。

「もちろんですよ。長谷川大尉はすごかつこいいですよ」

雪風ははつきりと断言した。その変に熱のこもった言い方に、明日葉はピンときた。女の勘は時にどんな高性能レーダーをも上回る性能を発揮するものだ。

「雪風、もしかしてあなたもその長谷川さんの事好きなんじゃないの？」

「なあッ!？」

「ええッ!？　そ、そうなのッ!？」

明日葉の言葉に激しく驚く信濃。突如そんな事を言われた雪風は

顔を真っ赤にしてあわあわと大慌て。その明らかな態度に明日葉は確信した。

（こりゃあ、本気で好きなのね）

「べ、別に私はそんな大それた事なんて」

「ああ、雪風姉さんはその長谷川って人の事本気だよ？　ただ彼のまわりが戦艦や空母が多くて駆逐艦の自分じゃ釣り合いが取れないっていつも一歩引いた場所にいろけどね」

「は、浜風えッ！」

浜風の容赦ないぶっちゃけに雪風はもう限界くらいにまで顔を真っ赤にして怒鳴る。人の想いを勝手に話されたので、雪風は結構マジで怒っていた。さすがの浜風もやり過ぎたと思って慌てて謝る。
「ご、ごめん雪風姉さん。ちよつと口がすべったというか、忘れて？」

「忘れられる訳ないでしょおおおおッ！？」

顔を真っ赤にして怒鳴りまくる雪風とそれを見ておろろとする信濃、全て納得したような満足げな明日葉、一人会話には入らずに本（恋愛物）を読み続けている磯風。部屋の中はすっかり乙女の恋話一色に染まっていた。

「ねえねえ、その長谷川さんってどんな人？」

「ど、どんな人と言われましても、すつごくかつこ良くて優しくて頼りがいがあつて、もう言葉じゃ言い表せないくらい素敵な方です」

「やつぱ好きなんじゃない」

「はうう・・・ッ！」

すっかり明日葉の流れに流されてしまっている雪風。明日葉はまだ子供でそういう話には疎い信濃を放ってさらに話を進める。今はもう姉ではなく女の子だ。

「へえ、そんなにいい人ならあたしも一度会ってみたいわね」

「あ、でも今長谷川大尉は前回の戦いで負傷されて内地で療養中です」

「そうなんだ　　って、何も泣かなくなつていいじゃない」

「だ、だつてえ、長谷川大尉にもしもの事があつたら・・・ッ！」

「・・・あなたって意外とネガティブ思考なのね」

頭を抱えて最悪を予想する雪風に苦笑いする明日葉。ふと思い出したようにやつとネガティブモードから復活した雪風に質問する。

「ねえ、その長谷川さんって人の写真ないの？」

「え？　あ、残念ながら持つてません」

「そっか、残念」

「すみません。お力になれなくて」

「　　これ貸してあげる。汚さないで」

そう言つて突如会話に入つて来た磯風はすつと服の中から手帳を取り出すとそこから一枚の写真を引き抜いてテーブルの真ん中に置いた。それは士官用の軍服を着た青年を隠し撮りした写真であつた。

「ああッ！　この方が長谷川大尉ですッ！」

「どれどれッ！？」

すぐに明日葉は写真を覗き込んだ。雪風はほおと頬を赤らめて幸せそうな顔をしている。それほどまでに彼の事が好きなのだろう。

一方明日葉は、

「・・・うーん」

一人腕を組んで真剣に何か考え込んでいた。

（うーん、確かに顔はかつこいい方ではあるけど、ちよつと物足りないかな）

女の子とは時としてもものすごくシビアになるのであつた。明日葉もその一人で翔輝の写真をじつと見詰め続ける。

（顔はそこそこいいから、たぶんそこまで多くの子に好かれるのは性格が大きいんじゃないかな。まあ、写真じゃわかんないけど。雪風の話聞く限りではすごく優しい人みたいだし。ちよつと優柔不断なところはム力つくけど、悪い人じゃないわね）

明日葉は一人納得したようにうなずくと自分のティーカップを掴んでまだ温かい紅茶をそつと飲んだ。

「うわあ、かつこいいお兄ちゃん」

「・・・ッ!？」

その突然の声に明日葉は思わず紅茶を吹きそうになったが何とかそれは堪えた。咳き込みながら顔を上げると、キラキラとした瞳で写真を見詰める信濃がいた。こんなにも嬉しそうな信濃は初めて自分と会った時以来、それほどまでに嬉しそうな顔だった。

「し、信濃？」

「この人が翔輝さんかあ。えへへ、ボクのお兄ちゃんになってくれないかなあ？ そうすれば翔兄しょうにいつて呼べるのになあ」

磯風は明日葉に雷が落ちたように見えた。小さく「ご愁傷様」とつぶやくと、磯風は再び読書に戻る。ちなみに本のしおりは翔輝の笑顔がプリントされた特製しおりだ。一体彼女は・・・

一方の明日葉は信濃の言葉に後頭部を殴られたような感覚がした。(え？ 翔兄い？ 明日姉えじゃなくて翔兄い？ 何で？ わ、私の大切な信濃がこんな奴の妹になるの？ そ、そんなのって、そんなのって)

「認めませええええんッ!」

Bannon!

すさまじい勢いでテーブルを叩いて立ち上がる明日葉。その勢いに負けて倒れた椅子とビクツと震える雪風とか、今の彼女にはどうでも良かった。彼女が見詰める先はただ一人 信濃だけだ。

「信濃ッ! お姉ちゃん認めません! こんな顔も中の上くらいで他に取り得もないようなダメ人間をお兄ちゃんと呼ぶなんて、お姉ちゃんは絶対認めませんッ!」

「え？ そ、そんなあ・・・」

明日葉に本気で怒られて信濃は涙目になってしゅんと落ち込む。

そんな彼女の冷静さを取り戻した明日葉は慌てて謝ろうとする。が、

「長谷川大尉に対する暴言は許しませんッ!」

突如怒鳴り声を上げたのは雪風。その表情は先程浜風に怒っていた時とは比べ物にならないほどの気迫に満ち、これ以上何か言えば

殴り掛かって来そうだった。

大好きな人を侮辱された事に激しい怒りを感じているのだろう。

明日葉は全面的に自分が悪いので素直に謝ろうとする。が、

「貴様の長谷川大尉に対する侮辱発言は万死に値する。判決　死刑」

雪風以上に怒りのオーラ　もはや暗黒世界に繋がってるんじゃないかと思えるほど真っ黒なオーラを纏って静かに怒り狂うのは磯風。

（ちよつとおッ！？　この子もその長谷川さんって人の事好きなんじゃないッ！）

この瞬間、明日葉は長谷川翔輝という人間が恐ろしく艦魂に好かれやすい人間であると理解した。

鬼神のごとく怒り狂う二人に明日葉は慌てて謝った。そりゃあもう土下座の勢いである。そんな明日葉に何も悪くない信濃まで謝り始め、浜風が呆れながら止めたおかげで二人は怒りの矛を納めた。

「今度大尉を侮辱するような事を言ったら許しませんよ」

「次は必ず　死なす」

「肝に銘じておくわよ。命に関わるから」

明日葉は改めて翔輝の写真を見る。やはりどう見ても普通に考えてこんなに女の子に好かれるような顔には見えない。

「汚れる。返して」

ピツと写真は持ち主である磯風に奪われた。彼女はその写真を丁寧に手帳の中に収めると内ポケットにしまった。一瞬見えたが、手帳の中身は翔輝の写真（隠し撮り）が満載だった。もはや笑うしかない明日葉。

一方明日葉に怒られたまま放置されている信濃もまたすっかり落ち込んでいた。

「元気出しながら信濃司令。明日葉はかわいかわいあなたを他の人に取られたくないだけなんだから」

「ちよ、ちよつと浜風ッ！　あんた何言ってるのよッ！」

浜風の爆弾発言に明日葉は顔を真っ赤にして怒る。だが真っ赤な顔ではまるで説得力がなかった。

「明日姉え、ほんとあ？」

さらに信濃までキラキラとした瞳で見詰めてくる始末。明日葉は「うう・・・」と言葉に詰まった後ブイツとそっぽを向く。その頬はまだ赤い。

「う、うるさいわね。あたしはただ信濃を心配して言ってるだけよ。姉として」

「素直じゃないねえ明日葉は」

「うるさいわねッ！」

ケラケラと笑う浜風に明日葉は顔を真っ赤にしながら怒る。そんなやり取りを見てくすくすと笑う信濃や妹の暴走に呆れる雪風、やつぱりまだ本を読んでいる磯風。五人の少女達は幸せな時間を過ごしていた。

その後、雪風達三人はそれぞれ自艦に戻って行った。残されたのは信濃と明日葉は互いの顔を見合うとお互いに屈託のない笑みを浮かべ合った。

「ボクね、やつぱり明日姉えが一番だよ」

「当然じゃない。あたしと信濃の絆はどんなものよりも硬いんだから」

誇らしげに言う明日葉に、信濃は嬉しそうに微笑むと静かにうなずいた。

外はすっかり暗くなり、『信濃』は呉を目指して南下を続けた。

「でも明日姉え、ボク翔兄いに会ってみたいな」

「ダメよ。あたしは絶対に認めないから」

「ええッ！、何でッえッ！？」

「ダメなものはダメよ。お姉ちゃん許さない」

「はうう、明日姉えのいじわるう」

そんな何気ない会話が、二人にとっては何よりも楽しかった。

だが、屈託のない笑顔を浮かべる信濃は自分の中にある冷たいものに苦しんでいた。

初めての海、明日葉とのきつと一度だけの旅、初めて知った姉の事。何もかも嬉しい事ばかりだった信濃だったが、一つだけ、心優しい彼女を苦しめるものが存在した。

明日葉も、それに気づいている。

明日葉もまた信濃が苦しむものに苦しんでいた。あんな物を使わなければいけないほど日本は追い詰められている。そしてそれを呉に輸送する事も自分達の任務であった。

悲しい狂気の産物。それが二人を悲しませていた。

日本が生み出した史上最悪の兵器。それは

第四章 偉大な姉の軌跡（後書き）

どうでしたでしょうか？

磯風の翔輝ラブっぷりは久しぶりに書いても清々しいです。駆逐艦界の武蔵ですよこの子は。

っていうか、翔輝の写真の隠し撮りって・・・

さらに信濃が翔輝を気に入ってしまい、明日葉は大慌て。もうここは書いていてニヤニヤしてましたよ。

さて、次回はどんな話かというと、詳しい人はすぐピンと来るでしょう。

『信濃』が運んでいた日本が狂ったとしか思えない兵器とは！？
・・・わかりますよね？ すみません。

では次回は今夜更新します。お楽しみに！

第五章 咲かせてはならない死の桜（前書き）

今回は空母『信濃』を語る上では外せないお話です。

知っている人は知っている日本海軍が生み出した史上最悪の兵器。

『信濃』はそれを呉まで運ぶ役目もありました。

自分の中にある最悪の兵器に苦しむ信濃と、そんな信濃を励ます明日葉。だがこの兵器が信濃と明日葉、仲のいい二人の絆を引き裂く事に・・・

二人は一体どうなるのか。答えは本編で！

第五章 咲かせてはならない死の桜

夜中、信濃は誰もいない航空機格納庫にいた。

必要最低限の明かりだけが灯された格納庫は薄暗かったが、結構遠くまで見渡せるほどの明かりではあった。

本来ならば烈風などが置かれていたはずの格納庫であつたが、今はそこに《ある物》が置かれていた。それを見詰める彼女の表情はそのかわい顔に合わないほど苦しくゆがみ、悲しげに揺れていた。

「またここにいたのね」
その声に信濃は振り向いた。

「明日姉え・・・」

明日葉は静かに信濃に歩み寄るとそつと彼女の横に立つた。信濃は明日葉を一瞥するが、再び先程と同じように《ある物》を見詰める。そんな信濃の視線を追って見て、明日葉もまた悲しげに瞳を翳かげらせた。

二人の前にある物、それは四〇機ほどの飛行機だつた　いや、もはや航空機とも呼べない狂気の産物であつた。

「こんな物まで造つて戦わなきゃいけないなんて、今の日本は狂つちやつたの？」

「そうね。狂つてる。狂いまくつてるよこの国は」

二人の苦しい視線を浴びているのはプロペラも車輪もない、後部にロケットエンジンを積んだだけの不恰好な謎の飛行機　特殊攻撃機『桜花』おうか。

特殊攻撃機桜花。特殊攻撃機という名前は聞こえがいいが、本当は飛行機でも何でも無い。

桜花は一式陸上攻撃機の機体下部に取り付けられて空を飛び、敵艦隊直前で母機から切り離されてロケットエンジンを点火。音速を超える速度で敵艦隊に突撃し、パイロットは目標艦まで桜花を操縦し、搭載された一・二トンの爆薬を起爆して敵艦を吹き飛ばす。通

称『人間爆弾』と呼ばれる純粋な特攻兵器だ。

「母機から切り離されたら、二度とは帰れない死の桜・・・まるで散りゆく桜が、決して枝には戻らないように、一度天空に舞い上がったら、二度と大地を踏む事のない飛行機　それが桜花」

信濃は苦しそくに唇を噛む。その表情はより苦しげにゆがみ、瞳には薄っすらと涙まで浮かんでいる。それほどまでに、目の前にある物に悲しんでいる。

「・・・わかつてる。今は特攻が主役の時代だって。でも、特攻なんて自殺攻撃をするのは絶対にダメッ！　パイロットは自分の腕で敵を倒すものなのに・・・ッ！　こんなので勝ったって嬉しくもなんともない・・・ッ！」

信濃は悲鳴のように叫んだ。その悲痛な声に明日葉は胸が締め付けられるような気持ちになる。

空母にとって艦載機は大事な仲間。もつと言えば子供のような存在だ。空母である信濃はだからこそこんな死の飛行機を認めたくなかった。

さらに、自分にはこの桜花に乗る特攻隊員も乗っている。自分が呉に到着すれば、彼らは確実に特攻に出撃する。それどころではない。呉で増産され、多くの若者達がこの死の桜に乗って特攻に向かう。そんなの、絶対に嫌だった。

「どうして・・・どうして正々堂々と戦おうとしないのッ！？　ボクはこんな狂った国を守る為に生まれてきたのッ！？　ボクに、この国の何を守れて言うのよッ！」

ついには泣き崩れてしまう。純粋で人一倍心が優しい信濃は特攻など理解できない。なぜ死ななければいけないのか。生きる為に戦うのではないのか。死ぬ事を前提に戦うなんて、それは間違っている。そう思っていた

今までだって零戦などの航空機での特攻は行われてきた。もちろんそれにも信濃は苦しんでいた。だけど、それらはあくまで元は通常兵器だ。使い方は本来それぞれ空中戦や爆撃、雷撃や偵察など用

途は様々である。

だが、桜花は違う。

人の命までもを部品の一部にした、正真正銘純粹な特攻兵器である。

信濃は許せなかった。

人の命をも道具としか考えない日本という国を、祖国が許せなかった。

暗いドックの中、信濃は姉達に会った時に勉強不足と言われないうちに駆逐艦などの艦魂に頼んで手に入れた色々な資料を読み漁った。日本という国を勉強し、日本がなぜこの戦争を始めたのを知った。

日本は、狂った鬼畜米英に殺される寸前で、生き残る為にこの戦争を始めたのだ。なのに、今の日本は勝利の為だったら死ぬ事をも恐れぬ狂国に成り果てていた。

本土決戦や特攻による徹底抗戦。それは開戦理由であつた日本を守る為の戦いとはまるで違う。死ぬ事を前提に戦うだなんて、そんなのは決して許される事ではない。

そして、自分はそんな狂った国に生まれ、今こうして狂った象徴とも言つべき史上最悪の特攻兵器を運んでいる。

多くの犠牲者を出す事になるかもしれない、狂った死の桜を

泣き崩れる信濃の小刻みに震える肩に、明日葉はそつと触れた。

「今の日本の搭乗員は、普通パイロットに飛ぶ事だつてできないような人達ばかりなのよ。正攻法じゃ勝てない。だから、こんな狂った物を作つてでも敵を倒そうとするのよ」

明日葉の言うとおり、今の日本の搭乗員の質は最悪だ。最低訓練飛行時間の半分にも満たないような訓練生が実戦に投入されている状況。まともに離着陸ができない者いるような航空隊で、一体何ができようか。

上空で編隊を組む事も、まともに飛ぶ事も、まともに空中戦や爆

撃や雷撃ができない彼らに、一体何ができるというのか。

だからこその特攻なのだ。

ヘタな奴でも命懸けでただ敵に突っ込む事だけを考えれば、通常攻撃なんかよりもずっと戦果を挙げられる。そんな状況だったら、特攻も正当化されてしまう。それが今の日本だった。

明日葉の言葉に、信濃はキツと彼女を睨み付ける。涙でいっぱい
の怒りが込もった瞳に睨まれ、明日葉は言葉を失う。そんな彼女に
信濃は悲鳴のように声を荒らげる。

「そんなの関係ないッ！ 大切なものを守る為に戦うのは生きる事
が前提なのッ！ 勝って、仲間達と今日の勝利と一緒に笑って分か
ち合う。それが生きる為の戦いじゃないのッ！？ 死ぬ事を覚悟し
た戦いなんて、そんなのもう戦争でも何でもないッ！ ただの自殺
思考じゃないッ！ ボクは、そんな戦いは絶対に認めないッ！」

「信濃……」

「私は胸を張ってすばらしいって言える祖国を守りたいのッ！ な
のに、こんな狂った考えしかできない国に守る価値なんてないじゃ
ないッ！ こんな腐った国なんてアメリカに潰されてしまえばいい
のよッ！」

「信濃ッ！」

パァンッ！

怒号と共に鋭い痛みが信濃の頬に炸裂した。信濃は痛みよりもジ
ーンと熱くなる頬を押さえながら顔を上げると、そこには今まで信
濃が見た事もないような激昂をした明日葉がいた。怒りに顔をゆが
める彼女の頬を流れる涙を見て、信濃は言葉を失う。

「……それ以上ふざけた事を言うなら、例え信濃だとしても許さ
ないわよ……ッ！」

「明日姉え……？」

「あんたに何がわかるッ！ 平和を知らないこの世に生まれてたっ
た数ヶ月の子供が生意気な事言ってるんじゃないわよッ！」

明日葉の悲鳴にも聞こえるような怒号に、信濃は戸惑いを隠せな

い。なぜ彼女が自分に激怒しているのか。なぜ彼女は泣いているのか、信濃にはわからなかった。

「みんな何で必死に戦ってるかわかってるの？ 国の為？ 天皇の為？ 確かに聞こえはいいかもしれない。でもみんな本当は大切なものを、家族や恋人、友達を守りたいが為に必死になって戦ってるんじゃないッ！ 例え特攻で敵の小さな空母を一隻でも葬れば、その守りたい人達の上に敵機が来ないかもしれないッ！ 大切なものを守る為に自分の命を懸ける、その何が悪いのよッ！ あんたのお姉さんの大和や武蔵だって、一体何の為に戦って来たと思ってるのよッ！ その長谷川さんや友達、生まれ故郷を守る為に必死になって戦ったんじゃないッ！ 武蔵は大切なものを守る為に死んだッ！ それは他の大勢の艦魂や日本人だって同じッ！ あんたなんか！ 彼らの気持ち全部わかるって言うのッ！？ あんたなんか！ 大切な人が自分達を守る為に死んだ苦しみがわかるって言うのッ！？」

泣き叫ぶ明日葉。もはや最後の方は説教や説得なんかではなく感情をぶちまけただけだった。だが、信濃にとってはそっちの方がずっと苦しかった。

確かに、自分は何も知らない。戦った事もなければ、誰かが死ぬ苦しみを味わった事もない。武蔵の死は確かに悲しかった。でもそれはまだ会った事のない存在を失った悲しみ。知っている人を失えば、もっと苦しいはず。そして、彼女は・・・

「明日姉えも、大切な人を亡くしたの？」

信濃の怯えながらの震える声での問いに、ようやく冷静さを取り戻した明日葉は静かに、つぶやくようにして答えた。

「・・・あたしの父さんはソロモン海で死んだ。兄さんも、特攻隊で死んだわ」

「そんな・・・」

信濃は目の前が真っ暗になった。

何かを失うという恐怖が、こんなにも近くにあったなんて。それ

も、自分が誰よりも大事に思っている明日葉が。

気まずい沈黙が舞い降りた。

二人とも熱くなり過ぎてひどい事を言い合ってしまった。冷静になった今なら、すぐに謝らなければならないとわかっている。でも、どう切り出せばいいのかわからなくて、どちらとも黙ったまま。沈黙が続くだけだった。

しばらくの沈黙の後、先に口を開いたのは信濃だった。だがそれは謝りの言葉ではなかった。確かに謝らなければならない。それはわかっている。だけど、大切な人を失った明日葉の悲痛な姿を見て、やはり特攻は間違っているという思いはより強くなっていた。

明日葉のように、誰かが苦しむ姿なんて見たくなかった。

特攻は認められない。そして桜花はその特攻思考の頂点の産物。これを実用化すれば、さらに多くの人達が特攻で死に、明日葉のように苦しむ人も増える。そんなの、嫌だった。

「もし、ボクが呉に行かなければ・・・こんな物に乗って飛び立つ搭乗員はいなくなる。ボクが呉に行かなければ、こんな物を空に飛ばさずに済む。ボクが呉に行かなければ」

「信濃ッ！」

自分を責める信濃に明日葉はその両肩を掴むと一喝した。

信濃は明日葉を正視できずうつむいてしまう。そんな彼女に明日葉は怒鳴る。怒りは再び燃えていた。むしろ先程よりもっと激しい。父や兄は立派に戦って死んだのだ。例え死んだとしても、自分はそんな二人を胸を張って言い父と兄だったと言える。

だが、信濃は違う。まだ生まれて数ヶ月くらいの世間知らずな普通の女の子だ。そんな彼女が自分が死ねばなんて考える事が、明日葉には許せなかった。何より、信濃は本当の妹のように思っている。彼女にそんな考えなど抱いてほしくなかった。

「それ以上言ったら今度こそ本気で怒るわよ。確かに特攻なんて邪道なやり方はあたしだって気に入らない。いくら大切な人を守る為だからといって、死ぬなんて絶対にダメな事よ。でも、それでも命

を懸けて戦う。それが軍人なのよ。でもあんたは違うでしょ？ 軍艦の魂だから軍人かもしれないけど、まだ子供のあんたが、何も知らないあんたが、自分が死ねばなんて考えるんじゃないわよ。死んだらもう二度と戻って来ない。だから、例え何があっても死ぬなんて考えず、自分の命を大切に、今を生きなさい。あんた、お姉さんに会う為に今までがんばってきたんじゃないの？」

諭すような明日葉の言葉。それは理性の部分はちゃんとわかっている。死ぬなんて絶対にダメだ。何せ自分自身がそう叫んでいたのだから。でも、感情はそうもいかない。自分が死ねば、これ以上特攻で死ぬ人が増える事はない。自分の犠牲で多くの人を守るなら、それこそが本望だと。それが特攻精神である事を、まだ彼女は知らない。

キツとしなのは明日葉を睨み付ける。それは勇ましい小さな軍人の姿に見えて、駄々を捏ねる小さな子供にも見えて、ただ何かを守りたいと願う天使のようにも見えた。

「そんなの関係ないッ！ 例え明日姉えが何て言っても、ボクはこんな物を運ぶくらいなら死んだ方がマシなのッ！」

涙を流しながら泣き叫ぶ信濃に、明日葉はカッと怒りが膨れ上がる。

「このわからず屋ッ！ もういいわよッ！ そんなに死にたいなら勝手にしなさいッ！ あたしはもう知らないからッ！」

そう怒鳴ると明日葉はキツと信濃を睨み付けた後彼女を突き飛ばした。いきなり突き飛ばされた信濃はバランスを崩してその場に尻餅を着いてしまう。

「明日姉え ツ！？」

その時、信濃は見た。

「・・・ッ！」

すぐに明日葉は信濃に背を向けたが、遅かった。その姿はしっかりと信濃の瞳に焼きついてしまった。

明日葉は今まで以上に悲痛に顔をゆがめ、ボロボロと涙を流

していた。見ているこつちまで苦しくなってくる、そんな痛々しい姿であった。

「明日姉え・・・」

明日葉は信濃に背を向けたまま無言のまま突然走り出すと格納庫を飛び出して行った。

信濃はしばし彼女が戻って来る事を期待して入り口を見詰めながら待ち続けたが、彼女が再び戻って来る事はなかった・・・

第五章 咲かせてはならない死の桜（後書き）

今回は人間爆弾、特殊攻撃機桜花が登場するお話でした。

史上最悪の兵器。そう言われても仕方ありません。同じ特攻兵器でも戦果を挙げている回天の方がまだ掩護のしようがありますが、桜花はもう掩護も何もできませんね。

そして、特攻を認めない信濃と兄を特攻で亡くした明日葉。

互いの想いは違うもの。それが原因で二人はケンカ別れしてしまう。明日葉に嫌われたと落ち込む信濃。だが、そんな彼女を海中から狙う狙撃者の影。
スナイパー

次回、ついに『信濃』が被雷します。

信濃、そして明日葉の運命は！？

次回は明日更新です！ お楽しみに！

うう、さすがに一日に連続三話更新は辛いです。

でも明日は残っている話を全部投稿しないといけません。しかもまだ完成してませんし・・・

とにかくがんばります！ 応援してくれている皆さんの為にも！ではまた明日お会いしましょう。眠いです・・・

第六章 信濃被雷 明日葉の決意と信濃の悲鳴（前書き）

いよいよ物語も終盤に入ってきました。

今回はサブタイトル通り『信濃』が被雷します。

敵潜水艦の存在を知らずに航行する艦隊。そこへついに『アーチャーフィッシュ』が牙を向く！

信濃、明日葉、雪風、磯風、浜風、アーチャーフィッシュ。様々な想いが交錯する《信濃編》もいよいよ激動編！

信濃達の物語を、どうか最後まで見守ってあげてください。

第六章 信濃被雷 明日葉の決意と信濃の悲鳴

暗い海を静かに進む『信濃』は淡い月の光に見守られながら南西に向かって走っていた。

だが、彼女達を見詰めるのはもう一つ存在した。

「やっと追いついたわね」

暗い海の底から潜望鏡を上げて『信濃』を見詰める『アーチャーフィッシュ』。潜水艦にとっての目である潜望鏡からアーチャーフィッシュもまたその光景を見て小さく笑うとメガネのブリッジをクイツと上げた。その翡翠色の瞳にはしっかりと敵の姿が見えている。

この時、今まで一直線に航行していた『信濃』だったが、敵潜水艦を警戒して之字運動を開始した。これは当然の措置であったのだが、皮肉にも回避の為の行動が逆に敵潜水艦を追いつかせ、絶好の攻撃チャンスを与えてしまった。

「世界は私達アメリカに味方してくれてるようね 戦闘用意ッ！

魚雷攻撃準備ッ！」

アーチャーフィッシュの声と同時に艦長も同様の命令を下した。

今まで静かに音を立てずに追跡を続けていた『アーチャーフィッシュ』がついに動き出す。潜望鏡を収納し、魚雷発射の為に深度を浅くする。

「目標前方の敵空母『ジュンヨウ』ッ！ 魚雷発射管1番から6番まで発射用意ッ！」

前部魚雷発射管全てを使って『アーチャーフィッシュ』は敵を攻撃しようとしていた。アーチャーフィッシュは沈み行く敵空母を想像して不敵な笑みを浮かべる。

海の暗殺者である自分達潜水艦は決して目立つ存在ではない。だがこうして確実に敵の艦船を撃滅してきた。その功績は戦艦なんかよりもずっと誇らしいものだ。

アーチャーフィッシュは

「メイド・イン・アメリカのヘビーな魚雷を味わいなさいジャップ
ッ！ 魚雷攻撃始めッ！ ファイアッ！」

刹那、『アーチャーフィッシュ』の前部魚雷発射管から真っ白な
空気の泡と共に、『アーチャーフィッシュ』から六本の魚雷が発射
された。その向かう先は 『信濃』。

月明かりの下、信濃は一人防空指揮所にいた。十一月の海は陸地
以上に寒く、風は凍えるように冷たい。吐く息は白く、深い闇の中
にそっと溶けていく。

信濃はかじかんだ手を擦り合わせたり自らの息をはあと吹きかけ
たりして温める。それでもやっぱり寒く、風が頬を撫でるたび震え、
耳は冷たさのあまり小さな痛みまで感じる。

そんな寒空の下なのに、信濃は決して中に入ろうとはしなかった。
壁に身を預けながら、時折チラチラと艦橋に繋がる扉を見てはため
息し、またチラリと扉を見てはため息。そんな事をもう一時間近く
していた。

ふと信濃は何気なく星空を見上げた。出撃の時はあんなに曇って
いたのに、夕方頃にはすっかり雲も取れ、今ではどこまでも澄んだ
星空が広がっていた。

だが、今の彼女にはそんな星空は見えていない。彼女が見ている
のは景色ではなく、自分の心の中だ。その時の表情は先程桜花を見
ていた時よりもずっと悲痛そうだ。

「明日姉え・・・」

信濃はぼそっと大好きな本当の姉のように思っている彼女の名前
をつぶやいた。そして再びドアを見て、泣きそうになる。

毎夜二人はこの防空指揮所で待ち合わせて他愛のない会話をする
のを日課としていた。だが、先程明日葉とケンカ別れしてしまった
今、指揮所にいるのは信濃ただ一人。いつもの時間になっても彼女は
現れず、信濃はたった一人で彼女が現れる事を信じて待ち続けて

いた。

だが、もう一時間も経っている。さすがの信濃も信じる気力が失い始め、悲しみや不安が胸を満たし、かわいい顔が悲痛にゆがむ。

「・・・明日姉え・・・来てくれないのぉ・・・？」

震える声でそう言った直後、耐えられなくなった信濃の瞳からほろりと涙が流れた。ずっと我慢していたが、もう限界だった。

信濃にとって明日葉は頼れる姉のような存在であり親友だ。そんな彼女とケンカ別れしてしまった事を、彼女はひどく後悔していた。彼女は自分を心配してくれていたのに、自分は自分だけしか見ていなくて勝手に泣き叫んで、彼女を傷つけ、彼女の優しさに抗った。その結果がこれだ。圧倒的に悪いのは自分ではないか。そう思うと、涙を堪えられなくてほろほろと頬を流れてしまう。

「明日姉えごめんね・・・でも、ボクはこんな兵器を運びたくない・・・青空に飛ばしたくないんだよぉ・・・ッ！」

泣きじやくる信濃は何度も何度も袖で涙を拭う。その度にゆらゆらと揺れる長いポニーテールはとても悲しげに揺れ、何度も涙を拭った袖はもうグチャグチャになっている。

桜花 それは決して生還を許さない死の桜。

そんな恐ろしく悲しい兵器を自分は運んでいる。これが実用化されるのは時間の問題だ。だがもし、このまま自分が呉に着かなければ、桜花をこの美しい空に飛ばす事もないのだ。

そんな事ばかり考えてしまい、信濃は愕然としてその場に崩れる。守るべきもの、それが何のかわからない。軍艦なのだから国を守るのが当然だが、こんな狂った国を守りたいとは、微塵も思わない

軍艦失格だ。

「大和お姉ちゃん・・・武蔵お姉ちゃん・・・ボク・・・一体どうしたらいいの？」

雲一つない美しい星空を見上げ、信濃はまだ見ぬ姉と、もう会えぬ姉に答えを仰いだ。

姉達は国の守り神として海軍の頂点に君臨している。一体彼女達

は、何を守る為に必死に戦って来たのだろうか。それを、ほんの少しでもいいから知れたかった。そうすれば、自分が守るべきものが見つかるかもしれない。そう思った。

守るべきものがあるのは桜花に乗る若者達も同じ事。だが、その大切なものを守る為に命を捨てるなんて、信濃には絶対理解できないししたくかった。何より、そんな事を誰にしてもしてほしくなかった。特攻は失うだけで何も得られない。失ったものは帰って来ない。決して忘れる事はできないのに・・・

日本は一体どこに向かっているのか。信濃にはわからない。わからなかった。

信濃はいつまでも星空を見上げて答えを待ったが、当然返答などある訳もなく、上を向いていた顔も次第に伏せていつてしまう。

一際冷たい風が頬を撫で、信濃は体を震わせた。艦魂は風邪を引かないとはいえ、いつまでもこんな寒空の下にいては心の方が凍り付いてしまう。

信濃は後から後から溢れ出して来る涙を拭いながら立ち上がる。

月明かりに照らされるその顔は悲しげにゆがんだまま、涙でグチャグチャになっている。

「明日姉え・・・」

信濃は明日葉を捜そうと寒い防空指揮所から飛び降りると、ふわりと甲板の上に着艦した。艦魂だからこそできる大胆な行動だが、それをいつもハラハラしながら見ていた姉はどこにもいない。

悲しげにため息を吐き、艦内に続くドアに振り返ろうとした刹那、ふと海の中に何かが見えた。不思議そうに信濃はそれを目で追い絶句した。

迫り来る海中を進む白い槍。それを理解した時には全てが遅かった。

「敵潜魚雷・・・ッ!? あ、明日姉え」

ズドオオオオオオオオオン・・・ッ!

「あああああああッ！」

突如鈍い爆音と振動が響き、巨艦『信濃』は大きく揺れた。同時に信濃の横腹が裂けて鮮血が飛び散り、幼い少女は真っ赤に染まる。信濃は激痛のあまり立っていられずに転倒。ベチャリという嫌な音と共に甲板に沈んだ。

「・・・い、痛い・・・ッ！ あ、明日姉え・・・ッ！ 明日かはあッ！」

大量の血が口から噴き出し、甲板を見えない血で染め上げる。それを引き金に信濃は激しく咳き込む。咳をするたびに血を吐き、自らを真っ赤に染め血の海でもがき苦しむ。

口や裂けた脇腹から血を流す小学生くらいの女の子。この世でも痛々しい光景だ。常人なら見ていられずに目を背けてしまう。そんな光景であった。

信濃は必死に起き上がろうと腕に力を入れるが、そんな力などにつくに失った体はまるで自分の体じゃないように言う事を聞かずに立てない。それどころか自ら血に滑り、信濃は再び血の海に沈んだ。
「明日姉え・・・助けて・・・痛い・・・痛いよお・・・苦しい・・・助けて・・・助けてえ・・・ッ！ 明日姉えッ！ 明日 ゲホオッ！ ゴホオッ！」

血の塊を吐き、信濃はぐったりと倒れる。

刹那、『信濃』の巨艦が少し傾いた。それは不沈空母と謳われる『信濃』の滅亡を意味する序章だった・・・

「命中ッ！ 魚雷4本命中！」

水を伝って響く爆音に命中を確信した『アーチャーフィッシュ』の乗組員達は歓喜した。その中でアーチャーフィッシュもまた小さく笑みを浮かべていた。

「日本の水中搜索能力なんて大した事ないわね。こっちの動きがまるでわかってないなんて。バカみたい」

アーチャーフィッシュは敵空母轟沈を確信していた。たかだか商船改造空母ごときが魚雷を四本も受ければ沈没は必至。しかも撃ち放った6本の魚雷は3本ずつ角度を変えて第一陣が生み出した破口に第二陣が炸裂するようになっていた。それだけではない。わざと命中深度を浅くして転覆を狙ったのだ。選りすぐりの精鋭が乗る自分にしかできない神業の連発である。それを受けて生き残る艦など存在する訳がなかった。

「さあて、敵の死ぬ姿でも見てやろうかしら」

アーチャーフィッシュは余裕の笑みを浮かべながら確認の為に上げられた潜望鏡と自分の意識を繋ぎ　絶句した。

「な、何で・・・何で生きてるのよッ!？」

アーチャーフィッシュは我が目を疑った。確かに魚雷が命中したはずの敵空母はわずかに傾いただけで何事もなかったかのように浮かんでいる。それどころではない。攻撃を受けた事によつて逃走を始めた。それも先程とほとんど変わらない速度で・・・

「う、うそよッ　魚雷を受けても何ともない艦なんて存在する訳ないのにッ！　何よあの空母ッ！　化け物じゃないッ!」

目の前の光景が信じられないアーチャーフィッシュは激しく取り乱す。その時、潜望鏡から見える景色に動きがあつた。敵の駆逐艦がこちらに向かつて突っ込んで来る。

「仕方ないわね。急速潜航ッ!」

攻撃を受けないように『アーチャーフィッシュ』は静かに沈降した。

しばらくして敵の爆雷攻撃が開始されたがそのどれもが見当違いな場所で炸裂している。どうやら敵はこちらの位置を捉えられていないらしい。改めて日本とアメリカの技術力の差を見た乗組員達は日本軍の哀れな反撃を嘲笑した　だが、たった一人だけ違った。

「・・・姉さん達に何て説明すればいいのかしら」

今頃はもうかなり離れた場所まで逃げたであろう敵の不沈空母に、アーチャーフィッシュは敗北を認めていた。

魚雷4本も受けても沈まずに高速で移動できる敵空母。

アーチャーフィッシュの合衆国海軍潜水艦としてのプライドはズタズタに引き裂かれた。

「・・・おもしろくない」

爆雷攻撃が続く中、アーチャーフィッシュは静かに艦橋から消えた。向かう先は魚雷発射管室。彼女は不貞寝する時は必ず魚雷の上で寝ると決めていた。

敵の爆雷攻撃の中、『アーチャーフィッシュ』はそれをあざ笑うように悠々と反転した。

「探し出してッ！ 必ず敵潜水艦を沈めるのよッ！」

暗い海の上を『磯風』と『浜風』を率いながら進む『雪風』の第一主砲の上に雪風は立って怒鳴っていた。その表情は怒り一色。かわいらしい小さなポニーテールも今は荒々しく揺れている。

三隻の艦尾に備え付けられた爆雷缶投下機から次々に爆雷が投下される。だが、実際この真下に敵の潜水艦がいるという確証はない。米潜水艦の隠密能力はこちらの索敵能力を上回っているので発見できない。

雪風は投下された爆雷が起爆して水柱を上げるたびに海面に浮遊物がないか確認したが、何も浮かんでこない事に齒軋りした。

「これじゃ、金剛こんごうさんの時の二の舞じゃない・・・ッ！」

雪風は悔しそくに唇を噛んだ。

それは一週間前の事、雪風達第十七駆逐隊はレイテ沖海戦の敗北で撤退する戦艦『大和』『長門』『金剛』の三隻を護衛していた。だが、敵潜水艦の奇襲攻撃を受けて『金剛』は沈没。同隊を組んでいた妹の『浦風うらかぜ』も沈没した。

また敵潜水艦の攻撃を護衛対象に当ててしまった。守れなかったという罪悪感と姉妹達が残して来た陽炎型駆逐艦としての誇りなどが壊れ、雪風は泣き叫ぶ。

「どこよッ！ どこにいるのよッ！ 出て来なさいよ鬼畜米英ッ！」

泣き崩れる雪風は何度も何度も悔しそうに握った拳を鉄の床に叩き付ける。皮膚が切れ、血がにじみ出ても構わない。悔しくて悔しくて、気が狂いそうだった。

脳裏に浮かぶのは忠誠を誓う大和の笑顔。信濃は彼女の妹。それも、たった一人になってしまった妹だ。必ず呉まで送り届け、武蔵や山城、金剛や瑞鶴の死、そして負傷して内地に送られた翔輝の事で笑顔が消えた大和を笑顔にする為に、雪風は何としても信濃を呉まで送り届けなければならなかった。それを邪魔する敵潜水艦。怒りが彼女の小さな体を包み込む。

泣き叫びながら雪風は爆雷を投下し続ける。だが、ついに爆雷が底を尽きた。それは『磯風』と『浜風』も同じ。全ての爆雷を投下し終えたのだ。

だが、海面には浮遊物は木の枝一本も浮かんではいなかった。

敵潜水艦を護衛の駆逐艦に任せて『信濃』は全速力で逃げていた。月明かりに照らされる『信濃』の甲板に明日葉はドアをぶち開けて飛び出した。そして、最悪の光景を見てしまう。

甲板の中程に血まみれでぐったりと倒れている少女、それはさっきまで無事だったはずの信濃だった。

「信濃ッ！」

悲鳴のような声で彼女の名を呼びながら明日葉は走る。近づくとつれて、その傷のひどさがより鮮明になる。あまりに痛々しくて目を逸らしたくなる光景。でも、明日葉は絶対に目を背けたりする事はなかった。

明日葉は信濃に駆け寄るとそのぐったりとした体を抱き上げる。不自然なほど軽く冷たい事に驚き、明日葉は必死に揺さぶりながら彼女の名を叫ぶ。

「信濃ッ！　しっかりしなさいッ！　信濃おッ！」

「明日・・・姉え・・・？」

小さな小さな声を発し、信濃は閉じられていた瞳をゆっくりと開

いた。目の前には誰よりも会いたかった明日葉の顔がある。それだけで、信濃は嬉しかった。

「明日・・・姉え・・・来て・・・くれたんだあ・・・」

「当たり前じゃないッ！」

「えへへ・・・明日姉え・・・大好き・・・だよ・・・」

「もういいッ！ もうしゃべらないでッ！」

信濃の体を抱き締めながら、明日葉は泣き叫ぶ。

朦朧とする意識の中、信濃は明日葉の温もりを感じた。自分を包

んでくれる優しい温もり。これが彼女が一番大好きな温もりだった。

「明日姉え・・・痛いよお・・・すごく・・・痛い・・・」

「わかつてるッ！ わかつてるわよ・・・ッ！」

明日葉は泣き崩れるばかり。そんな姿、信濃は見たくなかった。

初めて会った時、信濃は彼女に憧れた。大和撫子どりの美貌を持ちながら、かつこいい笑みを浮かべる彼女。その仕事振りもまたかつこ良く男にも負けない。汗や埃や油にまみれながらも、彼女は頼もしい笑顔をしてくれた。そんな彼女みたいな女になりたい。心からそう思っていた。

妹は、姉の背中を見て育つと聞いた事がある。

・・・ああ、今わかった。『信濃』にとって姉とは『大和』や『

武蔵』だ。彼女自身も二人の事は姉だと思っている。

だけど、『信濃』にとつての本当の姉は　やはり明日葉だ。

明日葉の背中を見て、自分は育ってきた。

彼女みたいになりたくて、がんばってきた。

大和や武蔵に会う以上に、ずっと明日葉といたい。そう思っていたのだ。だから、彼女の前でいつも笑って、がんばってきた。

そっか・・・ボクがほしかったものは・・・もう最初からあったんだ・・・

信濃はそつと、明日葉を抱き締めた。驚く明日葉に、信濃は血まみれの顔で優しく微笑む。その笑顔は汚れを知らない、純粋なものだ。

「・・・明日姉え・・・ありがとう・・・」

「な、何言ってるのよ縁起でもないッ！」

「・・・えへへ・・・怒られ・・・ちゃった・・・」

「信濃おツ！　しっかりしてえッ！」

明日葉は必死に信濃に声を掛ける。信濃はそんな明日葉に心配かけまいと「大丈夫・・・大丈夫だから・・・」と何度も繰り返すばかり。

明日葉はハンカチを取り出すと彼女の傷口に当てて止血しようとする。だが、それが無駄だという事は彼女もわかっている。それでも、するしかなかった。

痛みに苦しむ信濃を見ながら、明日葉は唇を噛んだ。

彼女を救うには、彼女の本体である『信濃』を救うしかない。『信濃』が復旧すれば、彼女も助かる！

そこまで考えが及ぶと、居ても立つてもいられなかった。

「明日・・・姉え・・・？」

明日葉は信濃の体をゆっくりと離す。信濃が不安になって必死にしがみ付くが、その力はいくらにも弱く明日葉を止める事はできない。信濃はゆっくりと甲板に寝かされる。信濃は不安になって彼女を見ると、明日葉は何かを決意したような顔をしていた。

「信濃ッ！　待ってなさいッ！　あたしがあんたを救ってみせるからッ！」

そう言い残すと、明日葉は立ち上がって走り出す。彼女の行動の意味を知った信濃は顔を真っ青にして悲鳴のように叫ぶ。

「・・・だ、ダメえ・・・ッ！　艦内は・・・き、危険・・・ッ！

戻って来て・・・ッ！　明日姉ええええええッ！」

信濃は必死になって叫ぶ。だが、明日葉はそんな彼女を救う為に危険な艦内へと飛び込んだ。その後ろ姿に、信濃は必死に叫び続けた。

「明日姉えええええええええッ！」

第六章 信濃被雷 明日葉の決意と信濃の悲鳴（後書き）

ついに『信濃』被雷。

プライドを傷つけられたアーチャーフィッシュに彼女を撃沈しよう
と死に物狂いで戦う雪風達。

そして、傷つき血まみれになる信濃とそれを救おうと危険な艦内に
走った明日葉。

次回は明日葉視点のお話で、『信濃』を、信濃を救う為に彼女が奮
闘します！

お楽しみにッ！

第七章 明日葉と少年達の死闘（前書き）

ついに被雷した『信濃』。そして艦体が損傷した事によって信濃もまた大怪我を負って血に染まった。

明日葉はそんな信濃を救う為に、浸水を止めようと水密扉を目指して艦内に飛び込んだ。

信濃を助けたい。大切な妹を助けたい。その想いだけで、明日葉は走った。

そして、浸水に吞まれる艦内で必死に戦っていたのは彼女だけではなかった。

今回はサブタイトル通り明日葉と少年兵達の物語です。

沈み行く『信濃』を救う為の物語が、始まります。

第七章 明日葉と少年達の死闘

明日葉は走っていた。

巨大空母『信濃』の艦内を必死に走った。

階段があれば下り、少しでも『信濃』の傷に近づこうと走った。そして、信濃と別れて十分後に艦最下部に続く階段を下り、途中から飛び降りた。着地の瞬間、バシャアンという音と共に靴の中に水が入って来た。見ると、足首くらいの高さまで水が溜まっていた。浸水した海水だった。

「結構水が入ってるわね・・・急がないとッ！」

明日葉は再び走る。水飛沫をあげながら水を蹴って走り続ける。すでに傾いていた『信濃』は反対側のタンクに海水を注水して傾斜を戻していた。さすがは超弩級空母『信濃』。これくらいの被害では全然問題ない。だが、それは『信濃』の話だ。こうしている今でも、『信濃』は苦しんでいる。少しでもその痛みを抑える為にも、明日葉は走った。

必死に走り続ける明日葉だったが、だんだんと走れなくなってきた。すでに水は膝よりも高い場所にまで溜まっている。水を吸った作業着が重くて走れない。溜まった水が邪魔で足を上げられない。それでも、必死になって走る。足が着かなくなったら泳いででも。

明日葉は必死に走る。と、その時目の前の水密扉に三人の兵達の姿を見つけた。

「どうしたのッ!？」

明日葉の声に兵達は驚いて振り返る。彼らはこの『信濃』に配置されたまだ若い少年兵だ。

少年兵達は女である明日葉に一瞬驚くが、その姿を見て彼女が工員だとわかると叫んだ。

「扉がしまらないんだッ！」

「何ですってッ!？ そんなバカなッ！ ちゃんとやってるのッ！

？」

「やってんだよッ！　でも見るッ！　ケーブルが邪魔で閉まらないんだよッ！」

少年の指した方向を見て、明日葉は絶句した。そこには水密扉を塞ぐように腕ぐらいの太さのケーブルが繋がっていた。

『信濃』はまだ完成はしていない。その為まだ作業用の装置などが置かれ、ケーブルなどが無数に張り巡らされている。そのケーブルはもちろん廊下などにもあり、それが隔壁閉鎖を阻んでいた。

「待つてなさいッ！」

明日葉はすぐに腰から作業用のスパナを取り出すと、ケーブルとケーブルを繋ぐ金具を外す。必死にボルトを全部外そうとするが、最後一本が錆びているのか硬くて回らない。

「くう・・・ッ！」

「貸せッ！」

見るに見かねた少年兵の一人が明日葉からスパナを奪うと、力いっぱい回した。

「コノヤロおおおおッ！」

十秒ほどの格闘の末、カキンッというきれいな音と共にボルトが回り出し、グルグルとスパナを回すとボルトは外れた。

「ほらよ」

「あ、ありがとう」

「礼なんていらねえよ。ほら、それより扉を閉めるぞッ！」

少年兵達は外れた邪魔なケーブルを蹴飛ばすと、力を込めて扉を閉めようとする。ゆっくりとだが扉は閉まり、そして完全に閉じられた。

『やったあッ！』

少年兵達は歓喜に沸く。明日葉もまたその一人で初対面の彼らと喜びを分かち合った。だがするに状況を思い出し真剣な顔になる。

「まだ閉めなきゃいけない扉が残ってるわ」

「おっし！　案内してくれッ！　力仕事なら任せとけッ！　なッ！

？」

「あつたり前だッ！」

「俺達の艦は俺達で守るんだッ！」

若いからこそその希望に満ちた顔。それを見て、明日葉にも希望が生まれる。

「あたしは御桜明日葉。見ての通りこの『信濃』の工女よ」

明日葉が名乗ると、少年兵達は一瞬驚いたような顔をした。

「え？ 何よ？」

「あ、いや何でもなし。俺は常盤和樹^{とけわかずき}二等水兵だ。よろしく」

そう名乗ったのは明日葉に変わってボルトを外してくれた少年兵だった。彼に続いて後ろにいたメガネを掛けた少年が「浅間浩太^{あさまこうた}二等水兵」と名乗り、もう一人の背の高い少年も「吾妻明二^{あづまめいじ}等水兵だ。頼むぜ」と名乗る。

年齢の近い少年少女達はお互いの顔を見てうなずき合つと、次の扉に向かつて走り出す。

目的は皆同じ。『信濃』を救う為だ。

そして明日葉はさらにもう一つ、『信濃』を助ける為に走る。

海水がどんどん浸水して来るなか、四人の少年少女達は水を蹴つて走って行った。

「おいおい、これで大丈夫なのかよ？」

常盤は今閉めたばかりの扉を見て不安そうに明日葉を見た。明日葉もまたその光景は予想外だったのか絶句している。

彼らが閉めた水密扉だったが、閉め切ったはずなのに隙間から水が溢れて来る。こんな事通常は有り得ない。

「突貫工事の影響だなこれは。これ以上は防ぎようがない。次の場所に行こう」

「そうだな。それに閉めないよりはマシさ」

浅間の言葉に吾妻も同調した。確かに閉めないよりはマシだが、これでは時間稼ぎにしかならず根本的な解決にはならない。

「せめてこの後ろに扉を閉めましょう！ 二重防壁ならきつと大丈夫！」

明日葉の意見に従い、もう一つの扉が閉められた。今度はうまくいった。

「おっしッ！ 次の扉に行くぞッ！」

常盤の声にうなずき、四人は再び走り出す。しばらく走ると目の前に階段が現れた。

「これを上って一階上から別の扉を閉めに行くわ！」

回りくどいが、すでに直接行く道は水没していた。苦肉の策である。すでに水は腰の高さくらいにまで来ている。これ以上は危険でもあった。

「けどよ、なんか傾いてないかこれ？」

浅間の言葉に明日葉も同意見だった。確かにわずかだが傾いている。それほどまでに浸水が激しいのだろう。設計段階ではありえない計算だ。

「突貫工事の上に未完成なのよ、この『信濃』は。さっきの隙間だつてそれよ。急がないと最悪の事態になるわ！」

最悪の事態、それは沈没だ。

だが、それだけは絶対に回避しなければならなかった。

「わかった！ 行くぞッ！」

まずは明日葉が上り、次に常盤が階段を上る。と、その時、

バンッ！

激しい音と共に反対側で閉まっていた水密扉が破壊された。同時に溜まりに溜まった海水が一気に流れ出し、鉄砲水のように四人を襲う。

「ぐわああああッ！」

「うわああああッ！」

階段を上っていなかった浅間と吾妻が鉄砲水に吞まれてすさまじ

い勢いで流されていった。

「浅間ッ！ 吾妻ッ！」

「ダメよッ！ あんたまで流されちゃうでしょッ！？」

荒れ狂う水の中に飛び込もうとする常盤を明日葉は必死に止める。

「だ、だけど浅間と吾妻がッ！」

「二人はきつと大丈夫よッ！ あつちには上に繋がる階段があと二ヶ所はある！ きつと二人ともそれに掴まって上ってくるわよッ！」

「だけど・・・ッ！」

それでもまだ飛び込もうとする常盤の頬を、明日葉は力いっぱい叩いた。驚く常盤に明日葉は泣きそうな声で怒鳴る。

「二人が生きていても『信濃』が沈んだら死んじゃうのよッ！？」

あたし達の役目は何ッ！？ この『信濃』を救う為にも浸水を抑える事でしょッ！？ 違うッ！？」

明日葉の怒号に、常盤はうつむいてしまふ。だが、次の瞬間彼はパンツと両手で両頬を叩くと顔を上げた。そこにはさっきまで取り乱していた少年の顔はなく、帝国海軍軍人の顔があった。

「そうだな。ありがとう御桜！」

「わかったならいいのよ。ほら、さっさと行くわよッ！」

「おうよッ！」

二人は再び走り出す。

明日葉はチラリと常盤の横顔を見る。その顔には希望が満ち溢れていた。きつと二人は生きている。だったら、今は彼らの為にも自分ががんばる。そんな想いがあるのだろう。

だが、そんな彼を見て明日葉は罪悪感に胸が潰されるような痛みを感じた。

なぜなら、さっきのはうそだから。

あの向こうは行き止まり。つまり、流された二人が生きている可能性などありえないのだ。

うそをつく人間にはなりたくはなかった。だけど、それをしてしまった。そして、彼を騙してこうして走っている。それが苦しかった。

た。

それでも、例えうそだとしても、今はこうするしかない。二人が助かる為にも、信濃を助ける為にも、こうするしかなかった……ッ！

二人は次の扉に向かって走った。様々な想いを胸に抱きながら、二人は走った。

明日葉と常盤はその後二ヶ所の隔壁を閉じた。だが、二人の努力も空しくすでに『信濃』は傾きがはつきりとわかるほどまで傾斜していた。これは明日葉達以外の兵達もこうして隔壁を閉じているのだが、ケーブルに邪魔されたり閉じても先程の明日葉達と同じように隙間から海水が浸水したりして完全遮断ができないでいるからであった。

空母『信濃』艦長、阿部俊雄大佐は被害は軽微と判断して直接陸地に向かうのではなく大阪を目指して『信濃』を走らせていた。だが、それは完全に謝った判断で艦内の浸水はより激しいものになっていた。

明日葉と常盤はさらにもう一つの水密扉を閉めていた。腰の高さまで水が溢れるその扉の閉口は苦戦を強いられたが何とか閉じる事に成功した。

「はぁ……はぁ……これで大丈夫だな？」

「ええ、でもまだ閉じられてない隔壁があるはず。全部閉じない事には浸水は拡大するわよ」

「そうだな。じゃあ次の扉に行くか」

「ええ、急ぎましょう」

二人は次の扉に走り出す。が、その時、

バキヤアンツ！

「ッ！？」「」

激しい音に驚いて振り返ると、今閉めたばかりの扉が壊れた隙間ができていた。今にも完全に壊れて外れそうだ。しかもいつの間にか扉の向こうはすさまじい海水が溜まっている。このままでは鉄砲水になる。

「に、逃げましょうッ！」

「間に合うかッ！ クソオッ！」

「ちよつとッ！」

常盤は外れそうな扉の前に立つと自分の体を押し付け足を踏ん張り必死になって扉を押さえる。その姿に啞然としている明日葉に向かって、常盤は怒鳴った。

「何してやがるッ！ さつさと逃げるッ！」

「ッ！？ で、できる訳ないでしょッ！？ あたしも手伝う！」

「バカヤローッ！ ここで二人揃って死にたいのかッ！？」

「あんたを置いて行ける訳ないでしょッ！？」

「行けッ！ お前はお前のやる事があるだろうがッ！」

「だからって見殺しになんかできないわよッ！」

そう叫んで近づこうとする明日葉に、常盤は苦笑いした。その笑みは悲しげで、どこか辛そうな、そんな笑みだった。

「いいんだよ。俺はどうせ死ぬ運命だったんだ。ここでお前を助けて死んだ方が意味あんだろ？」

その言葉に、明日葉は絶句した。

死ぬ運命。つまり彼は……

「あんた、桜花のパイロットなの？」

「ああそうだよ。桜花特攻隊の特攻隊員さ」

特攻隊員。それは明日葉にとって兄と同じ運命を辿る人。決して生きて帰って来ない、国の為に死に行く若者だ。

「驚いたか？ まあ驚くだろうな。だから俺は別にここで死んでも構わねえ。元々死ぬ運命なんだから気にするな。ただ、死ぬのが少し早くなっただけ」

「ふざけないでッ！」

明日葉は怒鳴った。

命を無駄にする奴が、彼女が一番嫌いだった。

兄もそうだ。自分と映画を観に行くという約束を破って、特攻で死んだ。残されたのは兄の遺書と髪の毛と爪、その他の備品だけだった。骨一本、帰って来る事はなかった・・・

生きている事が幸せな事なのに、目の前の少年もまた死ぬ覚悟をしている。それが許せなくて、悲しかった。

「生きているだけでいいじゃないッ！ それで十分なのよッ！ あんたには生きる権利があるッ！ 簡単に死ぬなんて言うんじゃないわよッ！」

明日葉の怒号に、常盤は驚いたような顔をしたが、すぐにフツと笑った。

「説教はそれくらいにしておいて、さっさと行けよ。ここは俺が時間稼いどくからよ」

「バカ言ってるんじゃないわよッ！ あんたも一緒に」

「お前を待ってる奴がいんだろ？」

「ッ!？」

驚く明日葉に、常盤はしっかりと彼女の瞳を見ながら言った。その目にあるのは予感ではなく確信。明日葉に帰りを待つ者がいると確信している瞳だった。

「あんた、何で・・・」

「お前の名前を聞いてピンと来たよ。先輩からこの艦の工女の中に艦魂が見える女がいるって聞いててな。それってお前だろ？ 御桜」

「そ、それは・・・」

「行つてやれ。たぶん、『信濃』は長くは持たない。会えるのはこれが最後だぞ」

その言葉に明日葉は胸が苦しくなりうつむく。その瞳には薄っすらと涙まで浮かんでいた。

そう、『信濃』はもう長くない。それは閉めても閉めても隙間から入り込んでくる浸水を見てわかっていた。

だけど、そんな未来を変えたくて、彼女は必死に戦った　でもダメだった。突貫工事の影響が、こんなにひどい形で出るなんて。これも全部、自分達工員の責任だ。

「・・・ごめんなさい」

「何で謝るんだよ。いいから、さっさと行って来い。そして『信濃』の艦魂に伝えてくれ「守れなくて悪かった」ってな。頼んだぜ」

常盤の言葉に、明日葉は涙を拭うと顔を上げた。その決心したような彼女の顔を見て、常盤はフツと笑った。

「いい目だ。最期にあんたに会えて良かったよ御桜」

「あたしもよ、常盤　でも、これだけは約束して。必ず生きて帰るって」

「・・・善処する」

「約束よ？　破ったら許さないからね！」

それを最後に、明日葉は彼に背を向けて走り出した。

戻れと叫ぶ自分がいたが、明日葉はそれを胸の痛みと共に押さえ込んだ。彼の為にも、信濃に会わなければいけない。会って、彼の言葉を伝えて、自分も謝る。そう決意していた。

振り返らずに明日葉は走った。

走って、走って、走り抜く。

ただ、信濃に向かって、涙を流しながら、必死に走った・・・

「チツ、　たく女の前だとどうしてこうかつこつけたがるかな、俺は」

そうグチを言った常盤はため息した。

だが、その体にはもう力は残されていない。今にも扉がぶち破られて押し流されそうだ。それを必死に堪えているのは小さな小さな、どうでもいいプライドだ。

女をあれだけ言って行かせたんだから、あいつが安全な場所まで行くまで耐える。そんな小さなプライドだ。

・・・だが、いくらそんなプライドでも、もう限界だった。踏ん

張る足や押さえている手は震え今にも倒れそう。

「・・・お袋、親父。あんたらより先に逝く俺をどうか許してくれな。親不孝者で、本当にごめん・・・今まで育ててくれて、ありがとう・・・姉さんも、浩二さんくさと幸せにな・・・」

そう言つて常盤は優しい笑みを浮かべた　その瞬間、激しい音共に扉が碎かれ、大量の海水が鉄砲水となつて流れ込んで来た。

常盤の姿は、消えていた・・・

後ろで激しい音と共に大量の海水が迫つて来る音。それらを聞きながら明日葉は走つた。

「あのバカ・・・ッ！　よくも約束を破つたわね・・・ッ！」

泣きながら、明日葉は小さく怒鳴る。また約束を破られた。本当に自分は誰かと約束をすると破られる事ばかりだ。

兄との約束も、常盤との約束も　そして、信濃との約束も。

何が《あたしがあんたを救つてみせるから》、だ。結局何も救えなかったじゃないか。

悔しくて、情けなくて、悲しかった。

こんな情けない姿、信濃には見せたくない。でも、行かなければならない。行かなくちゃいけないのだ。

明日葉は走つた。

階段を上り上の階に上がる。

すでに『信濃』は先程よりもさらに傾斜していた。浸水を止められず、艦内もずいぶ水没した階も多い。

『信濃』はもう長くない。

明日葉は彼女の元へ走り続けた。

彼女に会う為に、明日葉は走る。

瓦礫がれきを飛び越え、さらに走り続ける。

もうすぐ甲板。その時、

ガチャァンガラガラッ！

「ッ!？」

すさまじい音が上からし、頭上を見上げた瞬間　天井が崩れて
大量の瓦礫が明日葉に降り注いで来た。

「きゃああああああああッ！」

明日葉の悲鳴は瓦礫の崩れる音の中に消え、視界は埃で真っ白に
染まる。音が止み埃が消えたそこにはわずか一瞬にして築かれたコ
ンクリートや鉄骨や鉄板でできた瓦礫の山。そして　瓦礫の下に
は血にまみれた白く細い手が力なく伸びていた・・・

第七章 明日葉と少年達の死闘（後書き）

特攻隊員であつた常盤達。彼らは『信濃』を助ける為に戦い、散つて逝つた・・・

そして瓦礫の下に倒れた明日葉の運命はッ！？

今夜、全ての物語が完結します。

次回はいよいよ最終回。

沈み行く短き命の戦姫、信濃の最後の物語をお楽しみに！

最終章 信濃と明日葉の絆は永遠に（前書き）

《艦魂年代史外伝 大和の妹 幼き戦姫信濃の短き命の物語》
もいよいよ最終話。

沈み行く信濃の最期の物語。

死を目の前にして、彼女は一体何を想うのかッ！？

そして、明日葉との絆はッ！？

信濃と明日葉の最後の物語をどうか最後までご覧ください！

最終章 信濃と明日葉の絆は永遠に

被雷から数時間。すでに夜は明けて朝の光がまぶしく輝く頃、結局敵潜水艦を撃沈できなかった『雪風』『磯風』『浜風』の三隻は浸水によって大きく右舷に傾く『信濃』を護衛していた。

本来『信濃』は大和型戦艦の強力な防御力を持っている。この時『信濃』が被雷した魚雷の数は四本。通常空母なら沈没必至のような大打撃だが、大和型戦艦の防御力を浮け継ぐ『信濃』はたかが魚雷四本程度で沈むようなひ弱な空母ではない。事実、大和型戦艦二番艦・戦艦『武蔵』は魚雷二〇本、爆弾二〇発以上受けて沈没したという驚異的な記録が残っている。それが空母『信濃』の防御力だった。

だが、状況はそんなに甘いものではなかった。

先に説明したが、水面下は完璧な防御がされていたので魚雷の影響は少ない。はずだったが、『アーチャーフィッシュ』の放った魚雷は通常よりも高い位置に魚雷が命中した。そこは水面下と水面上の境界線付近で、炸裂した魚雷は水面上の手抜き装甲を破壊。そこから大量の海水が艦に流れ込んできていた。せつかくの大和型戦艦の防御力も無駄となってしまうた。

そして明日葉達のように多くの兵も水密扉閉鎖に全力を注いだが、まだ若すぎる乗組員はその作業を思うようにできなかった。何しろ巨大過ぎるが故に艦内を熟知している者が少なく、命令があってもその場所がどこかわからない兵が続出していた。さらに扉自体もケーブルに邪魔をされたり閉めても隙間から水が入って来たりなどで浸水は止められなかった。

この信じられないような次々のアクシデントで艦内は大混乱。海水はさらに『信濃』の艦体を呑み込んでいった。

超巨大空母『信濃』は、右に大きく傾斜したまま海にそうして数時間も浮かび続けていたのだ。すでに機関は停止して航行不能。自

力で動く事はできなかった。そんな『信濃』を無事に日本へ連れて行こうと雪風達は必死になっていた。

巨艦『信濃』から引つ張ったロープを各艦それぞれ後部第三主砲に巻きつけ、『雪風』『磯風』『浜風』の三隻は機関全開で走る。日本まで『信濃』を曳航するつもりであつた。

「絶対に『信濃』は沈ませないわよッ！ 何が何でも日本まで連れて帰るわよッ！」

機関全開の為、艦の魂である雪風の息は荒くびっしりの汗を掻いていた。だがそれでも彼女は必死になってロープを引つ張つた。

大和の為に、信濃の為に、日本の為に。何が何でも『信濃』を助けるつもりだつた。

だが、満載排水量七万を超える巨艦、それも浸水した大量の海水でさらに重くなつた『信濃』をたかが三隻の駆逐艦で引けるはずもなかつた。三隻全ての排水量を足しても一万トンにも届かないのだ。雪風は必死になつて曳航しようとするが、彼女の努力も空しく巨艦の重さに耐えられないロープは切れ、曳航は失敗に終わった。

全ての手を尽くし終えた・・・

もはや自分には彼女を救う事はできない。その現実には雪風は愕然とし、第一主砲の上で泣き崩れた。

結局自分は、何もできない無能だつたのだ。

大和に会わせる顔など、もはや一抹も残されてはいなかつた・・・

被雷七時間後、右に大きく傾く『信濃』は傾斜が激しく注排水装置が使用不能となつていた為、もはや復原不能になつていた。

阿部艦長は必死に復旧作業の陣頭指揮を執つていたが、もはや『信濃』の復旧は不可能となっている。混乱しながらも兵達は必死に復旧作業をしているが、襲い来る海水に吞まれたり流されたりで艦内で水没者も続出していた。

そんな『信濃』の傾いた飛行甲板の上に、血まみれの信濃がぐつたりと倒れていた。もはやその体には力はなく、痛みすらも感じな

いほど衰弱していた。

虚ろな瞳で信濃は晴れ渡った空を見上げた。皮肉な事に、出撃の時にあったあの鉛のように重い雲は一切なく、太陽が燦々と輝いていた。

信濃があれだけ見たいと願った晴れた青空が、目の前に広がっていた。

「・・・きれい」

信濃は小さくつぶやいた。

こんな晴れた空を見て、本当に嬉しかった。

このきれいな青空を、明日葉と一緒に見たかった。そう心から思う。

あれから明日葉は現れない。まだ総員退去の命令が下っていないから、退艦したとは思えない。そもそも彼女が自分を置いて退艦するなど考えられなかった。

だとしたら、彼女はもう・・・

（嫌あッ！ そんな事ないッ！ そんな事想像したくもないッ！）

信濃は心の中で悲鳴を上げた。

明日葉は死んでなんかない。きっと生きている。そう願ってるし信じてる。だから、自分はこうして彼女の帰りを待ち続けたのではないか。被雷から七時間、ずっと。

でも、彼女は現れなかった。すでに艦内は大量の海水で水没している。兵達の多くも水死していた。だけど、明日葉は生きている。そう願いたかった。

「明日姉え・・・」

思い出すのは明日葉の笑顔。頼りがいがあった、優しくて、きれいで、心から誇れる姉である。彼女がいたから、自分はここまで来られたのだ。

会いたい。

死ぬ前に会って話したい。

涙がこぼれる。

会いたくて会いたくて仕方がない。

彼女の笑顔が見たい。

明日姉え。

明日姉え！

「明日姉え・・・ッ！」

「何よ・・・大声で呼んじやって・・・」

そのどこか力ないが、懐かしい声に信濃は驚きながらも嬉しそうに振り向いた　だが、そこには自分が想像していた光景とはまるで違う、最悪の姿があった。

「明日姉え・・・ッ！？　ど、どうしたのその怪我・・・ッ!?」

信濃の前に現れた明日葉は、頭から血を流し、腕や足も切れて血が噴き出し、鉄の棒を杖のようにして立っている、痛々しい姿だった。

「信濃・・・会えて・・・良かった・・・」

それだけ言うと、明日葉は突然力を失って糸の切れた人形のように倒れた。信濃は驚愕するがすぐに這って彼女の近づく。自分も苦しい体だったが、彼女はそれを引きずってでも明日葉に近づいた。

近づくにつれて、その鮮明な光景に信濃は涙を流した。

血まみれで痛々しい姿の明日葉。だが、その美貌だけは血にまみれていても輝やきを失っておらず、それが余計にその姿を痛々しく見せる。

「明日姉え・・・ッ！　しっかりして・・・ッ！」

明日葉まで到達した信濃は彼女の体を抱き締めながら泣き叫ぶ。

その悲痛な声に、明日葉はゆっくりと瞳を開いた。

「信濃・・・」

「明日姉え・・・ッ！　どうしたのその怪我・・・ッ!?」

「・・・大した事ないわよ」

「大した事だよ・・・ッ！」

笑って誤魔化そうとする明日葉に怒鳴る信濃。自分が本気で心配しているのに、誤魔化してなんかほしくなかった。その想いが伝わ

ったのか、明日葉は小さくため息をして口を開く。

「・・・あんたを助けようとして・・・艦内を走り回って水密扉を閉めてただけど・・・その時崩れてきた瓦礫の下敷きになって・・・こんな様よ・・・情けないわね・・・」

頭から血を流しながらそう言った明日葉は泣きそうな顔の信濃を見て小さく笑った。だが、その笑顔は信濃の胸をより締め付け、こぼれそうだった涙は限界を超えて頬を流れる。

自分なんかの為に、ケンカした相手なんかの為に命懸けで走り回り、大怪我を負った。

親友のようで、妹と思う信濃の為に、明日葉は己が命を犠牲にしても助けようとした。それが彼女の言っていた特攻精神の源だと、信濃は悟った。

何かを助ける為に、命を懸ける。その意味を今さらながら理解できた。

自分なんかの為に命を懸けた明日葉を、信濃は強く抱き締める。

「信濃・・・？」

「明日姉え・・・ごめんね・・・ボクなんかの為に・・・」

その言葉に、明日葉は苦笑した。

彼女が気負いする必要はないのだ。これは自分で決めた事。彼女を助ける。その為に命を懸けた。だから、彼女は何も悪くない。謝る必要なんかないのに。

「バカね・・・信濃だからやったのよ・・・それ以上は何も言わないで・・・」

「明日姉え・・・ッ！ 明日姉え・・・ッ！」

信濃は泣きながら彼女を抱き締め続ける。その華奢きゃしゃな体を全部使って、信濃は明日葉を抱き締める。そんな信濃を明日葉も抱き返してやりたかったが、もうそんな力は残されていなかった。

だが、温もりは感じ合える。それで十分だった。

信濃にとっても、こんな状態でも明日葉がいてくれて本当に良かったと思っている。無事じゃないけど、生きていてくれた。こんな

に嬉しい事はない。

こうしてまた出会えて、本当に良かった。

この美しい青空の下、二人で一緒にいられて本当の本当に良かった。

信濃はもはや力を失いつつある明日葉を必死に抱きとめた。この腕で、彼女を守りたいと願ったのはこれが最初ではない。

必死になって自分を建造してくれる彼女を見て、その笑顔を見て彼女を守りたいと心から思った。

でも、守れなかった。こうして血まみれになっている彼女を、自分を守る事ができなかった。

だから、せめて最後だけは、この腕の中で安らかにしてほしかった。

しばしの間、二人は互いの温もりを感じ合った。

そこに彼女がいる。そう思うだけで、自然と恐怖は消え、安堵が心を包み込む。

どちらからとなく、笑みがこぼれた。

最後の時間だと思うと、自然と楽になる。例えお互いの命の灯^{とも}火が消えようとしても、嬉しく、楽しく、思い出となる時間だった。

だが、それもついに終わりを告げようとしていた。

「信濃お・・・？ どこ・・・？ あたしを一人にしないで・・・」
その弱々しい声に信濃は絶句した。

もう、彼女の瞳には自分の姿が見えていない。それどころか、もう景色も、光も、その瞳には見えないのだろう。

明日葉の命が、尽きようとしていた・・・

「明日姉え・・・ッ！ ボクはここだよッ！ ここにいるよッ！」

「信濃お・・・良かったあ・・・」

「しっかりと明日姉え ゲホゴホッ！」

信濃は激しい咳と共に大量の血を吐いた 彼女の命もまた、尽きようとしていたのだ。

激しく咳き込む信濃の背を、明日葉はそつとさすった。もう目は見えないはずなのに、それでも、苦しむ妹の為に必死になって・・・

「・・・信濃・・・大丈夫・・・？」

「ボクは平気・・・それよりも明日姉えの方が・・・」

明日葉は力なく首を横に振った。

「・・・あたしはもう・・・助からないよ・・・信濃と一緒に・・・あたしもこの海に散るわ・・・それが・・・あたしの本望だから・・・」

すっかり上った太陽の光が、二人を照らし上げた。

暖かな日差しに包まれながら、明日葉は自分を抱き締める信濃を、残った力を振り絞って抱き返す。

大好きな姉に抱き締められる感触に、信濃は泣いた。

「・・・ごめんね・・・守れなくて・・・」

「いいの・・・明日姉え・・・ボクも・・・明日姉えを守れなかったもん・・・お互い様だよ・・・」

「あんたに、伝言があるわ・・・あんたを救おうと必死になった特攻隊員からよ」

「ボクに？ 何？」

「「守れなくて悪かった」って」

「・・・そっか。ありがとう」

名前も顔も知らない特攻隊員からの伝言に、信濃は心が温められた。

みんな、自分を助けようと必死になってがんばってくれたのだ。

その事実にも、信濃は嬉しくて笑みを浮かべる。

もう見えないはずなのに、明日葉は信濃が笑ったような気がした。そして、意識がだんだんと薄れてきた・・・

「・・・信濃・・・ごめん・・・あたし・・・もうダメだ・・・一足先に・・・逝ってるからね・・・」

その言葉に信濃は驚愕し、慌てて彼女の体を揺する。

「だ、ダメえッ！ 明日姉えッ！ 明日」

明日葉の瞳はゆつくりと閉ざされ、二度と開く事はなかった。だが、その表情は何か満足したような、優しげな笑みを浮かべていた。信濃はしばらく泣きながら明日葉の体を抱き締め続けた。だが、涙を拭いて明日葉の頬にそつと自分の唇を触れさせた。

顔を上げた彼女の顔は涙でグシャグシャだったが、彼女が今できる最高の笑みを浮かべていた。それは本当に純粹で、優しげなものであった……

「明日姉え……待っててね……後からちゃんと逝くから……」
信濃はそう言い、どこまでも澄んだ青空を見上げた。

思い出すのは明日葉との楽しい思い出。

何もかもが楽しく、嬉しかった日々。

でもきつと、天国でまたそんな日を送るのだろつ。それが楽しみだ。

そしてもう一つ、この海の向こうにいるはずのまだ見ぬ姉の事を想う。

「……大和お姉ちゃん……一目でいいから……会って見たかったなあ……」

それが彼女の最後の言葉だった。

ゆつくりと瞳が閉じられ、力を失った彼女の体は明日葉の体と共に倒れ、そして二度と動く事はなかった。

その瞬間、『信濃』は急速に右に倒れ、そのまま横転。巨大な爆発などは起こさず、静かに、ゆつくりとその巨体を海に沈めていった……

沈み行く『信濃』を囲むようにして円陣を組む『雪風』『磯風』『浜風』の三隻の第一主砲の上には、それぞれ雪風、磯風、浜風の三人が信濃と明日葉、その他大勢の乗組員達に向かって敬礼していた。

その瞳に皆、涙を浮かべながら……

空母『信濃』、大和型戦艦三番艦として建造され、途中超巨大空母に路線を変更して建造され完成した日本海軍最後の希望であったが、幾度となく悪化する戦局に振り回され手抜き工事をされた上に欠陥だらけの竣工となった。そして、最後の航海では不運にも敵潜水艦の攻撃を受け、さらに無理な工事と兵員の不十分さが受けた魚雷の対処を遅らせ、その巨体を海に沈める羽目になった。だが同時に少女の目的だった桜花を使用不能にさせる事はできた（ただし、その後桜花は実戦に投入されたが敵艦隊到達前に母機群が全滅されたり、例え突入しても大きな戦果は挙げられなかった）。誰よりも命を大切に想う少女は、大好きな姉のように慕う明日葉と共に、天国に旅立った。空母『信濃』は世界軍艦史上最短記録のわずか十日の命を終え、日本近海にその巨体を静かに、永遠に沈めた

最終章 信濃と明日葉の絆は永遠に（後書き）

《信濃》しなの

大和型戦艦三番艦 改造空母『信濃』

出身 横須賀海軍工廠（神奈川県）

身長 142cm

髪型 ポニーテール

実年齢（1944年11月現在） 0歳

外見年齢 10歳前後

誕生日 11月19日

家族構成 姉・大和・武蔵

好きなもの 明日葉・大和・武蔵・翔輝・平和な日々

嫌いなもの 戦争・特攻・桜花・命を捨てる覚悟

本作主人公の一人、大和と武蔵の妹で、日本海軍最後の希望であった大和型戦艦三番艦改造空母『信濃』の艦魂。一人称は《ボク》といういわゆるボクっ子。純粋な性格をしていて笑顔がとてもかわいらしい。いつか姉達に会える事を信じて日々勉強をしながらその日を待ち続けていた。自分を建造してくれている工員の一人である明日葉とは姉妹のような関係で、彼女の事を心から慕っている。彼女の為だったら何でもする覚悟もできているほど彼女の事が好き。そんな大好きな姉と共に、信濃は竣工からわずか十日、彼女が生まれてから二ヶ月ちよつとという短い生涯を終えた。

《御桜明日葉》みづく あさは

役職 民間造船所工員 空母『信濃』工員

出身 神奈川県横須賀市

身長 162cm

年齢（1944年11月現在） 18歳

誕生日 12月24日

家族構成 父（戦死） 母（病死） 兄（戦死）

好きなもの 信濃・客船・造船所・機械いじり・海

嫌いなもの 聞き分けのない人・礼儀を知らない人・戦争・アメリカ

本作主人公の一人、民間造船所出身の工員で『信濃』の造船に携わる。夢は客船の建造であつたが、戦争にその夢は断たれ、『信濃』の建造をする事になった。艦魂が見える力を持っていて、信濃とは姉妹のように仲がいい。かわいい信濃の為なら何でもしようとするほどのシスコン。信濃が翔輝を気に入った時は全力反対したほどの過保護っぷり。そんな彼女も最期は信濃と共に海深くに没した。

あとがき

信濃「読了お疲れ様でした〜！ わざわざ読んでもらって、ボク本
当に嬉しいなあ」

明日葉「まあ、お礼だけは言っておいてあげるわよ」

作者「ははは、という事で今回のあとがきは豪華に別話編成でやっ
てみました！」

信濃「うわあ、わざわざボクの為にありがとう！」

作者「いやいや、かわいい信濃の為にこれくらい」

明日葉「信濃に近づくな汚らわしいッ！」

作者「ひ、ひどいなあ・・・」

明日葉「大丈夫信濃？ 今こいつに手触られたでしょ？ 早く洗面
所で手を洗ってきなさい。ちゃんと石鹸つけてね」

作者「ひどいなあッ！」

信濃「あ、明日姉え、さすがにひどいと思う」

明日葉「何言ってるのよ！ これは全部あんたの為なんだからね！」

信濃「うう・・・」

作者「ははは、明日葉はシスコンだねえ」

明日葉「だ、誰がよッ！」

作者「いや、そのものズバリ？」

信濃「えっと、過保護っていうのかな？」

明日葉「し、信濃あんたまで・・・ッ！」

作者「あーあ、唯一の味方を失ったね。可愛いそうに」

明日葉「う、うるさいわねッ！」

作者「ちよっと待てッ！ スパナは投げる物じゃないだろッ！？」

明日葉「うるさいうるさいうるさいッ！」

作者「うわあ、ベタなツンデレ」

明日葉「あたしのどこがツンデレよッ！」

作者「キャラ設定全部？」

明日葉「死なすううううッ！」

作者「それもツンデ　ぐわああああッ!？」

信濃「ああッ！　作者さんにロン　又スの槍があッ!？」

明日葉「いや、なんか形スパナっぽかったし」

信濃「全然違うよッ！」

作者「し、死ぬかと思った・・・」

明日葉「・・・あつたつて、不死身よね」

作者「そりゃあ、これくらいで死んでたらこんなシリーズ書けないつて」

信濃「た、たくましいなあ・・・」

作者「まあね。それじゃあとがきもそろそろ本番に入るよ！」

明日葉「は？　本番つて、あたし達で何かするんじゃないの？」

作者「ふん、甘いな。僕がその程度の作者だと思うか？」

明日葉「思う」

信濃「ダメ作者、だよな？」

作者「・・・お前らさ、少しは作者を立てようよ」

明日葉「無理」

信濃「ノーコメントで」

作者「お前ら・・・まあ、別にいいけどさ。じゃあそろそろまじめにやるぞ！」

明日葉「で？　一体何をするのよ？」

作者「そりゃあ読者の皆さんが望む展開に決まってるじゃないか」

明日葉「だから何よ？」

作者「そりゃあ二人のお色気シ　ンごわあッ!？」

明日葉「何考えてるのよこのエロ作者あッ！　18歳になったからつて調子乗ってんじゃないわよッ！」

作者「じよ、冗談だよッ！　まじめにやるから口　ギ又スの槍はやめてえッ！」

信濃「二回出て来たのに伏字の場所が違うから、バレバレだよ？」
作者「いや、元々有名だから伏字の意味がないから大丈夫」

信濃「それもどうかと思うけど」

作者「ではそろそろ本題に入ります。そこで信濃。本編では会う事のできなかつた大和や武蔵、翔輝とは会ってみたいですか？」

信濃「え？　そ、それは会いたいけど・・・」

明日葉「ま、まさかあんた・・・ッ！」

作者「その願い聞いて差し上げましょう！　ではどうぞッ！」

??「も、もういいんですか？」

??「・・・早く入れ愚姉」

??「ちよつと！　お尻を蹴らないでよ！」

??「お前ら、少しは大人しくしてろって」

明日葉「あ、あれって・・・ッ！」

信濃「もしかして・・・ッ！」

作者「そうです！　信濃の姉であり本編メインヒロインの戦艦『大和』の艦魂！　さらに人気上昇中で大和よりも人気がある予感な戦艦『武蔵』の艦魂！　さらにさらにそんな二人に愛される本編主人公の長谷川翔輝！　豪華なゲストをお呼びしました！」

大和「初めまして。大和型戦艦一番艦、戦艦『大和』の艦魂です」

武蔵「・・・大和型戦艦二番艦、戦艦『武蔵』艦魂」

翔輝「長谷川翔輝元海軍中佐。よろしくね」

信濃「あ、ああ、お姉ちゃん？　本当に、お姉ちゃんなの？」

大和「信濃。私のもう一人の妹・・・」

武蔵「・・・妹」

信濃「お、お姉ちゃああああんツ！」

抱き合う大和、武蔵、信濃の三人。

大和三姉妹が無事全員揃った感動的な瞬間であつた・・・

信濃「お姉ちゃ〜んツ！ 会いたかつたよ〜ツ！」

大和「私も会いたかつたわ。雪風からあなたの訃報を聞いた時は本当に悲しかったもの・・・でも、会えて本当に嬉しいわ」

信濃「大和お姉ちゃ〜んツ！」

武蔵「・・・いい子、私の、たつた一人の妹」

信濃「武蔵お姉ちゃ〜んツ！」

作者「いやあ、微笑ましい光景だね」

翔輝「そうですね。さすが作者さんです。ちゃんとキャラクターの事も考えてるんですね」

作者「もちろんだとも！ これでも極上艦魂会の司令長官だぞ？

気配りは何よりも大切な事さ！」

明日葉「ただ単に最古参だからって理由でなつたんでしょう？」

作者「どうして君はいつもそうやって・・・」

翔輝「まあまあ、あなたは？」

明日葉「御桜明日葉。空母『信濃』の工員よ」

翔輝「御桜か。よろしくね」

明日葉「ふん」

そっぽを向く明日葉と呆然とする翔輝。

翔輝「えつと・・・」

作者「ああ、悪いね翔輝。この子君を目の敵にしてるから」

翔輝「ど、どうしてですか？」

作者「いやあ、かわいい妹のような信濃を君に取られたくないんだ

よ。ほら、信濃何か君の事気に入ったみたいだし」

翔輝「そ、そうなんですか？」

明日葉「ふん。あんなの一時の気の迷いであって今は」

信濃「翔兄いッ！ 翔兄いにも会いたかったよおッ！」

ガバツと後ろから翔輝の背中に抱き付く信濃。

明日葉「なあッ！？」

大和「ちょ・・・ッ！？」

武蔵「・・・ッ！？」

翔輝「ちょ、ちよつと信濃。いきなり何だよ？ それに翔兄いって・・・？」

信濃「ボク、翔輝さんの事をお兄ちゃんって思う事にしたんだ！だから、翔兄いって呼びたいの！ いいかな？」

翔輝「いや、それは別に構わないけど・・・」

信濃「やったーッ！ 翔兄い大好きッ！」

翔輝「うわあッ！？ ちょ、ちよつと・・・ッ！」

明日葉「あ、あんた信濃から離れなさいッ！ 汚らしい手で信濃に触るなあッ！」

大和「信濃おッ！ いくらあなたでも翔輝さんに勝手に抱きつくなんて許しません！」

武蔵「・・・判決」

??「死刑」

明日葉、大和、武蔵、??が翔輝と信濃に襲い掛かる。

作者「って、何で磯風がいるの？」

??「ちょ、ちよつと磯風えッ!」

??「あはははッ! みんな楽しそう!」

??と??がさらに加わる。

作者「えつと・・・なぜに雪風と浜風まで?」

明日葉「ちよつとあんたッ! 信濃から離れなさいッ!」

翔輝「ひ、引つ張るなッ!」

信濃「嫌ああああッ! ボク翔兄いと結婚するッ!」

明日葉「ッ!? 原子レベルでこの世から抹殺するッ!」

翔輝「お、落ち着けッ! 話し合えばわかるッ!」

明日葉「ちよつとッ! あんたどこ触ってるのよッ!」

翔輝「僕じゃないぞッ!」

明日葉「あんた以外にいないでしょ変態ッ! っていうか顔が近いッ!」

翔輝「んな事言われても大和達が押すからッ!」

明日葉「う・・・」

翔輝「え? どうしたの? 顔が赤いけど・・・」

明日葉「ッ!? う、うるさあああああッ!」

翔輝「あ、暴れるなッ!」

大和「離れるですッ!」

武蔵「・・・離れる外道ッ!」

信濃「嫌ああああッ!」

磯風「暗殺決定」

雪風「暗殺なんかしちやだめえッ!」

浜風「あはははッ!」

大和「な、何で雪風までいるのッ!」

雪風「大和司令申し訳ありませんッ! 磯風が暴走して・・・ッ!」

翔輝「あれ? 雪風も来てたんだ?」

雪風「はうッ！ 長谷川さん・・・ッ！」

武蔵「・・・死なす」

翔輝「うおいッ！ 武蔵何する気だお前ッ！」

信濃「翔兄いはボクんだあッ！」

磯風「撲殺決定」

浜風「盛り上がったきたあッ！」

明日葉「このバカッ！ 信濃から離れなさいよあッ！」

翔輝「無茶言うなッ！」

明日葉「こ、こっち見ないでえッ！」

翔輝「見たくて見てる訳じゃないよッ！」

明日葉「ひ、ひどいッ！ 最低よあんなッ！ 嫌い嫌い大嫌いッ！」

翔輝「作者さんッ！ 助けてくださああああいッ！」

作者「あはは、やっぱ翔輝の周りはいつもとタバタじゃないとね。つていうか明日葉なんか怪しくないか？」

明日葉「怪しくなんかないッ！」

作者「そうですか。別に構いませんけど。では今回はここまでとさせていただきます。

ノンストップで更新してきた《信濃編》もこれで本当に完結です。ここまで読んでもらいありがとうございます。

では次なる外伝を と言いたいところですが、そうもいかないのです。

実は皆様には申し訳ないのですが、艦魂年代史シリーズはしばらく更新中止とさせてもらいます。

え？ 艦魂をやめるのかって？

違いますよ。僕はまだ学生という身分です。ですのでついに来てしまったのですあのシーズンが・・・

そうッ！ 期末テストッ！

中間の結果がやばかったので、期末はまじめにやらないとヤバイので、今回は学業の方に力を入れさせてもらいます。

皆様にはご迷惑をお掛けしますが、そういう事なので申し訳ありません。

テストが終わったらまた会いましょうッ！

ではまたいつかッ！

・・・っていうか、大和達いつまでやってるんだろ？」

大和「翔輝さんを返してえッ！」

武蔵「・・・翔輝は私のものッ！」

信濃「嫌だああああッ！　ボク翔兄いのお嫁さんになるんだもんッ！」

明日葉「信濃おッ！？　あ、あんたのせいよこのバカぁッ！」

翔輝「理不尽だああああッ！」

磯風「惨殺決定」

雪風「磯風落ち着いてえッ！」

浜風「あはははははッ！」

はぁ・・・

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5781f/>

艦魂年代史外伝 ～大和の妹 幼き戦姫信濃の短き命の物語～

2010年10月8日12時49分発行